

2012 年度
関西福祉科学大学大学院
社会福祉学研究科
心理臨床学専攻

修士論文題目

青年期の自我発達上の危機とその要因
—自傷傾向をとりあげて—

指導教員（ 鎌田 次郎 教授 ）

社会福祉学研究科心理臨床学専攻

学生番号 21161011 氏名 向島 知里

青年期の自我発達上の危機とその要因

—自傷傾向をとりあげて—

向島 知里

関西福祉科学大学大学院 社会福祉学研究科 心理臨床学専攻

【問題と目的】

長尾(1999)によれば、青年期の自我発達上の危機状態とは、「中学生から高校生にかけての親子関係における独立と依存の葛藤や自我同一性の確立の葛藤が生じ、交友関係も困難となって、とくに自我の弱い者は、閉じこもりなどの非社会的行動や精神・身体的症状をとまなう不適応状態を呈することもある状態」と定義されている。長尾(1989)は、この定義に基づいて青年期の自我同一性や親子の葛藤を測定する A 水準項目(問題内省水準:以下 A 水準)と不適応状態を測定する B 水準(問題自覚水準:以下 B 水準)とで構成される質問紙を不登校生徒のケースから作成し、青年期における自我発達上の危機状態に影響を及ぼす要因(1999)や心理過程(2002)を研究してきた。本研究では長尾(1989, 2002)における課題を検討することにした。さらに、青年期の自我発達上の危機が成長と不適応の分岐点であり、危機を乗り越えることで自我が成長するという説について検討を行うことにした。

そのため本研究では、以下の3点について検討を行った。

1. B 水準において不登校以外の不適応状態である自傷傾向も包括できるのか確認を行う。
2. 自我の弱さから A 水準に移行し、さらに A 水準から B 水準へ移行するという心理過程が自我同一性の課題が最も顕著になる後期青年期においても見られるのか検討を行う。
3. 自我の弱さや、A 水準、B 水準の高さが自傷傾向に影響するかどうかを検討した。
4. 危機を乗り越えて自我が強くなるという説を確認するために、自我の強さの程度、A 水準、B 水準得点において、自傷経験 3 群間の差を検討する。

【方法】

調査協力者:大阪府下の A 大学の学生 758 名(男性 242 名、女性 516 名)平均年齢 20 歳を対象とし、質問紙調査を実施した。

調査内容:①青年期の自我発達上の危機状態尺度(長尾, 1989) [A 水準 $\alpha = .803$] [B 水準 $\alpha = .783$] ②自我強度尺度(長尾, 2007) [$\alpha = .784$] ③自傷傾向質問紙(岡田, 2002, 2003, 2005, 2010)

【結果と考察】

1. 男性は B 水準から自傷傾向を予測すること

はできないが、女性は予測できる可能性があると言えた。

2. その結果、後期青年期においても、長尾(2002)で示された前期青年期においても「青年期の自我発達上の葛藤から不適応状態への心理過程」は同じであるという結果を得られた。

3. 女性において自我強度の弱さが自傷傾向に影響することは証明されたが、男性の場合はそのような影響はみられなかった。また、A 水準が自傷傾向に影響するということは男女共にみられなかった。

4. 未経験者群が最も精神的に健康な群であることがうかがえた。また、現行経験者が A 水準・B 水準が高く、自我強度が低いと明らかになった。しかし、過去経験者と現行経験者の間に差がなかったため、過去経験者が自傷を乗り越えて自我が強くなったとは言えない。これに関して、過去経験者の自我強度得点は未経験者と現行経験者の間に位置していることから、有意な差はないものの過去経験者は自我が弱い者から強い者へと移行している時期ではないかと推察された。

本研究で生まれた課題として大きく以下の3点があげられる。

一つ目に、自傷傾向尺度の項目と男性の特性が重複している可能性があるため、男性用と女性用を分けた自傷傾向質問紙を作成するか、自傷行為得点に重みづけをすることでより正確な自傷傾向質問紙が作成できるのではないかと考えられる。これにより、男性は自我が弱くなったとしても自傷傾向にそれほど影響しないという結果を改めて検討できると推測される。

二つ目に、自傷経験 3 群のうち、過去経験者群が実際に過去経験者であったのか断定できない点があげられる。そのため、過去経験者であると断定できる「3 年以上過去にしたことがある」という選択肢を設けての再調査の必要が考えられる。

三つめに、危機を乗り越えて自我が強くなるという説を確認するために、自我の強さの程度、A 水準、B 水準それぞれの得点において、自傷経験 3 群間の差を検討した。その結果について、更に詳しく明らかにするために聞き取り調査を行い質的に検討していく必要があることが示唆された。

要約

本研究では、自我の弱さから青年期の自我発達上の危機状態 A 水準（問題内省水準：以下 A 水準）に移行し、さらに青年期の自我発達上の危機状態 B 水準（不適応水準：以下 B 水準）へ移行するという心理過程が自我同一性の課題が最も顕著になる後期青年期においてもみられるのか検討を行った。その結果、長尾（2002）で示された前期青年期における心理過程と後期青年期における心理過程は同じであるという結果が得られた。

また、B 水準において、不登校とは異なる問題をもつ青年に対しても検討が行えるのか自傷傾向を用いて確認を行った。結果、男性は B 水準から自傷傾向を予測することはできないが、女性は予測できる可能性が明らかになった。

さらに、データを自傷行為未経験者・過去経験者・現行経験者の 3 群に分類し、A 水準・B 水準・自我強度のそれぞれの尺度で比較を行った。

その結果、未経験者群が最も精神的に健康な群であることがうかがえた。また、現行経験者は A 水準・B 水準が高く、自我強度が低いことが明らかになった。しかし、過去経験者と現行経験者の間に差がなかったため、過去経験者が自傷を乗り越えて自我が強くなったとは言えない。これに関して、過去経験者の自我強度得点は未経験者と現行経験者の間に位置していることから、有意な差はないものの過去経験者は自我が弱い者から強い者へと移行している時期ではないかと推察された。

今後はさらに詳しく明らかにするために質的に検討していく必要があると示唆された。

目次

第1章 問題と目的

第1節 問題	1
第2節 先行研究の概観	
2-1. 青年期における自我発達上の危機	1
1) 青年期における自我発達上の危機の定義	
2) 青年期における自我発達上の危機状態に影響を及ぼす要因	
3) 青年期における自我発達上の葛藤から不適応状態へ至る心理過程	
4) 自我発達上の危機の機能	
2-2. 自傷行為の概念	3
1) 自傷の定義	
2) 自傷の機能	
2-3. 大学生における自傷行為	4
1) 実態	
2) 発達上の要因	
第3節 先行研究からの課題	
3-1. 青年期の自我発達上の危機状態 B 水準における課題	4
3-2. 青年期の自我発達上の危機状態 A 水準から B 水準への心理過程の研究対象課題	4
3-3. 自傷傾向質問紙について	5
第4節 仮説	
4-1. 自傷行為と青年期の自我発達上の危機状態	5
4-2. 自我発達促進要因としての自傷傾向	5
第5節 本研究の目的	6

第2章 調査研究

第1節 調査方法	
1-1. 調査時期	7
1-2. 調査対象	7
1-3. 使用尺度	7
1) 基礎データ	
2) 青年期の自我発達上の危機状態尺度 (長尾, 1989)	
3) 自我強度尺度 (長尾, 2007)	
4) 自傷傾向質問紙 (岡田, 2002, 2003, 2005, 2010)	
1-4. 質問紙の改変点	7

1-5.調査手続き	7
1-6.倫理的配慮	8
1-7.回収したデータに関して	8
1)質問項目の欠損データに関して	
2)携帯電話の下4桁の欠損データに関して	
3)携帯電話の下4桁の重複に関して	
4)重複した回答者に関して	
5)再調査で新たに得られたデータに関して	
第2節 分析方法	
2-1.基礎データ	9
2-2.因子分析	9
2-3.性差と学年差の検討	9
2-4.相関分析	9
2-5.重回帰分析	9
2-6.自傷経験3群の群分け	9
2-7.自傷経験3群を用いた分散分析(全データと標本データ)	9
第3章 結果	
第1節 記述統計	10
第2節 因子分析	
2-1.危機状態尺度A水準の因子分析	11
2-2.危機状態尺度B水準の因子分析	13
2-3.自我強度尺度の因子分析	14
2-4.再検査	15
第3節 性と学年による比較	
3-1.性別と学年別の平均値と標準偏差	16
3-2.危機状態A水準における性と学年による分散分析	16
3-3.危機状態B水準における性差と学年差	17
1)危機状態B水準における性と学年による分散分析	
2)危機状態B水準における性差	
3-4.自我強度における性差と学年差	17
3-5.自傷傾向における性差と学年差	18
1)自傷傾向における性と学年による分散分析	
2)自傷傾向における性差	
3)自傷傾向における学年差	
第4節 自傷傾向尺度における項目内差	19

第5節 各尺度の相関関係	
5-1.各尺度得点の相関関係	20
5-2.男性における各尺度の相関関係	21
5-3.女性における各尺度得点の相関関係	21
5-4.男性・女性における相関関係の特徴	22
第6節 仮説を検討するための重回帰分析	
6-1.男性の場合	23
6-2.女性の場合	23
第7節 自傷経験3群による尺度得点の差	
7-1.自傷経験3群による危機状態A水準・B水準、自我強度得点の分散分析 (全データ)	24 25
1)自傷経験3群による危機状態A水準の分散分析	
2)危機状態A水準得点における自傷経験3群差	
3)自傷経験3群による危機状態B水準の分散分析	
4)危機状態B水準得点における自傷の経験差	
5)自傷経験3群による自我強度得点の分散分析	
6)自傷の経験3群による自我強度得点の差	
7-2.自傷経験3群による危機状態A水準・B水準、自我強度得点それぞれの 分散分析(無作為抽出データ)	28
1)自傷経験3群による危機状態A水準の分散分析	
2)自傷経験3群による危機状態B水準の分散分析	
3)自傷経験3群による自我強度の分散分析	
第4章 考察	
第1節 危機状態B水準は自傷傾向を予測できるか	29
第2節 後期青年期における自我発達上の危機状態への心理過程	29
第3節 仮説の検討	29
第4節 男女による違いについて	30
第5節 自傷行為の経験3群による相違	31
第6節 結論	33
第7節 今後の課題	34
参考文献	35
謝辞	37

資料

第 1 章 問題と目的

第 1 節 問題

Erikson (1959) の唱えた自我同一性 (Ego Identity) の理論は、青年期の自我形成を考察するうえで大きな影響を及ぼした。彼は、青年期において果たさねばならない心理・社会的な発達課題として「自分は何者であるか」という問いに対して、「これが自分である」という自我同一性の確立を提唱している。そして、自我同一性をうまく確立できなかった場合、同一性拡散の危機に陥ると提唱した。

我が国では自我同一性の確立の過程や、自我同一性の確立に悩む青年やその病理との関連など様々な報告や研究がなされてきた。

その中で、自我同一性拡散と関連している事象のひとつに自傷行為があげられると言われている (西園・安岡, 1979; 竹内・小泉・上月ら, 1986)。

自傷行為とは、自殺を意図せずに、自らの身体を刃物で切ったり、かきむしったり、燃やしたりするような行為をいう。このような自傷は、精神的苦痛を一時的に緩和する試みとして行われる。しかし、精神的苦痛に対する対処としての自傷は、繰り返される過程で次第にその効果が薄れていく。そして徐々に痛みに鈍くなり、より頻回に、より深く切らなければ、当初と同じ効果が得られなくなっていくという嗜癖性が生じる。また、自傷行為経験者の方が自傷行為未経験者よりも 10 年後の自殺死亡率は数百倍にも高くなるという研究結果も報告されている (Howton, K, Rodhan, K, Evans, E., 2006)。つまり、自傷行為は自殺企図とは異なるものであるが、長期的にみた場合、自殺に至る可能性のある行為だと言える。そして、自我同一性拡散に陥ることで自傷行為に至る可能性がるということは、同時に自殺に至る可能性も生じることとなる。

このように、危機性の高いものへと移っていく過程を紐解くことができればさらなる理解と予防に繋がっていくのではないかと考えられる。

第 2 節 先行研究の概観

2-1. 青年期における自我発達上の危機

1) 青年期における自我発達上の危機の定義

長尾 (1999) によれば、青年期の自我発達上の危機状態とは、「中学生から高校生にかけての親子関係における独立と依存の葛藤や自我同一性の確立の葛藤が生じ、交友関係も困難となって、とくに自我の弱い者は、閉じこもりなどの非社会的行動や精神・身体的症状をともなう不適応状態を呈することもある状態」と定義されている。

この定義の特徴として、(1) 青年期を青年前期 (中学生時)、青年期中期 (高校生時)、青年期後期 (大学生時) と幅広くとらえていること、(2) 思春期を青年期の初期として連続的にとらえていること、(3) 発達の危機の内容を青年期前期と青年期中期の親子関係上の葛藤と交友関係上の自己収縮、青年期中期と青年期後期の自我同一性の確立の葛藤の 2 つでとらえていること、(4) 発達の危

機内容と不適応状態としての危機内容とを区別していることの4点があげられる(長尾, 2005)。

長尾(1989)は、この定義に基づいて青年期の自我同一性や親子の葛藤を測定するA水準項目(問題内省水準)と不適応状態を測定するB水準(問題自覚水準)とで構成される質問紙を作成した。

2)青年期における自我発達上の危機状態に影響を及ぼす要因

長尾(1999)においては、親子関係上の葛藤や自我同一性の葛藤などの青年期の発達の葛藤に対して自我の強さの程度や交友関係のあり方、家族の凝集性が影響を与えていることが確認された。また、青年期の不適応状態に対して、自我の強さの程度が影響を及ぼしていることが明らかになった。

さらに、自我の強さの程度、交友関係のあり方、家族の凝集性の中で自我の強さが青年期の自我発達上の危機状態に最も影響を及ぼしていることが明らかにされた。

3)青年期における自我発達上の葛藤から不適応状態へ至る心理過程

長尾(2002)は、ストレス過程システム理論を元に青年期の自我発達上の危機状態A水準からB水準へ経過していく過程を中学生・高校生を対象にして検討した。その結果、2通りの過程が明らかになった。

1つ目に、特別なライフイベントがなかった中学生の場合、自我が弱ければ、青年期の親子の葛藤や自我同一性確立の葛藤(A水準)に直面し、その葛藤に対して自責という対処行動を用いることによって不適応状態(B水準)に展開していくモデルが確立された。

2つ目に、高校生の場合は、自我の強さの程度とライフイベントの衝撃度が自我発達上の葛藤に対して相互に作用しあい、それに自責という対処行動が加わることで、結果、不適応にいたるという過程が明らかにされた。

また同時に、自我の強さの影響力が高いことから、青年期の自我発達上の危機状態の先行要因として自我の強さの程度を要因としてあげ、自我が弱い場合、自我発達上の葛藤が生じた時には、自責という対処法略をとりやすいパーソナル特性も影響して不適応状態となりやすいのではないかと述べている(Fig.1-2-1)。



Fig.1-2-1 青年パス・ダイアグラム(長尾, 2002)

4) 自我発達上の危機の機能

宅（2002）は、思春期・青年期の生活はストレスに満ち、心理的危機も体験するがこのような体験をひとつの「転機」として人格的な成長につなげていく視点が重要なものであると提案している。このとき重要になるのが「心の成熟」であると述べている。そして、長尾（1991）は自我の強さと「心の成熟」を同義と捉え研究を行っている。

つまり、危機をうまく適応的に乗り越えることによって、心は成熟し強い自我が育つ可能性が示唆されるということである。これについては、長尾・前田（1976）が、「危機を一つの分岐点」とであるという捉え方をし、危機によって成長が促進される方向に向かうか、神経症、精神病、非行などの方向へ向かうのかといった二面性を示唆している。

2-2. 自傷行為の概念

1) 自傷の定義

自傷行為という概念は、1935年、Menningerによって局所的自殺として提唱された。この時、Menningerは自傷を自殺の延期をする行為として捉えていた。これは自傷が自殺の亜型として考えられていたからである。しかし、現在では自傷行為は「自殺の意図をもち自分の身体を自己損傷する行為」と定義されることが多くなっている。本研究でもこれを定義として用いることとした。

2) 自傷の機能

自殺の意図をもちに行われる自傷行為がどのような意図をもって行われるのかということについて、自傷行為は“対象喪失、分離の葛藤などから生じる失意体験、それがもたらす怒り、不安、緊張、抑うつなどを解消する試みであり、自己の身体を傷つけることでそれを達成しようとするものである”と、安岡（1996）は述べている。

また、手首自傷をすることで得られるものとして、現在4つの機能があると言われている。1つ目が「ヒステリー」であり、あてつけに行われる自傷行為であり、相手を思うがままに動かそうとするために行われる。2つ目が「手首の人格化」であり、自分に失意を与えた対象を攻撃し、罰するために、自分の手首を対象と同等視して傷つける行為であり、自己懲罰もこれに含まれている。3つ目が、「自我機能の回復」であり、自傷行為の痛みによって、離人状態から現実感覚を取り戻すために行われる。自傷行為によって自我境界を区別することで現実を認識するという自我機能の修復のために行われる。4つ目が、「否認・逃避」であり、自己の内面的・心理的な葛藤を否認し、逃避するために、自傷行為を行うことで自分とは切り離し、直面化を避けるために行うといわれている（安岡，1996）。

2-3. 大学生における自傷行為

1) 実態

角丸（2004）は大学生の自傷経験率を調べたところ19%であったという。

また、岡田（2005）は女子大学生を対象に過去2～3年の間に刃物で体を傷つけたことがあるかどうかを2000年から2004年にわたって横断研究を行った。その結果、過去2～3年の間に刃物で自傷行為をしたことがある者はおおむね8～10%程度であり、5年間の間で自傷行為を行う学生が増加したとは言えないということが明らかとなったとしている。また、自傷行為を経験したことのある者は約9%程度であることが明らかになり、一般的な大学生における自傷行為経験者の比率が9%程度ではないかと示唆している。また、1週間に何度も行っているものが1%であったとしていることから、2～3年以内に自傷行為を経験したことがあるものの中から、自傷行為が習慣化していくものは1%程度であると考えられる。

2)発達上の要因

角丸・山本・井上（2005）が、自傷経験とエリクソンの発達理論における青年期の課題である自我同一性の確立について研究を行った。その結果、青年期の大学生において自我同一性拡散の状態にある学生は、境界性パーソナリティ障がい傾向を高く有している可能性があるということが示唆された。さらに、境界性パーソナリティ障がい傾向を高く有している者の中で自己の感覚や構造が脆弱な自己脆弱性のある者は自傷しようと試みる、または自傷した経験がある可能性が高いことが明らかとなっている。

第3節 先行研究からの課題

3-1.青年期の自我発達上の危機状態 B 水準における課題

青年期の自我発達上の危機状態尺度の B 水準である不適応を測る尺度は登校拒否青年を参考に項目が作成されている。しかし、青年期の自我発達上の危機状態によって現われてくる問題は不登校に限らない。もし、自我発達に関連している他の問題行動と関連性が高いと示されるのならば、青年期の自我発達上の危機尺度はより広い範囲で有効に利用できると考えられる。そのため、本研究では、自我の発達に関連していると考えられる自傷行為を取り上げて検討を行った。

3-2.青年期の自我発達上の危機状態 A 水準から B 水準への心理過程の研究対象課題

長尾（2002）において青年期の自我発達上の葛藤から不適応状態に移行する過程が検討されている。しかし、自我同一性の課題が最も問題となるのは18歳以降の後期青年期であるという説（笠原，1980）があるのに対して、この時調査した対象が中学生と高校生だけであった。そのため、本研究では18歳の大学1年生から大学4年生の22歳までを調査対象として検討を行った。

3-3.自傷傾向質問紙について

過去の研究においては、直接的に自傷行為の経験・未経験についてだけを尋ねている質問紙が存在する。しかし、倫理的な面に配慮をし、本研究では、日常的な自傷行為に至る前兆的な行動から自傷行為までを幅広く捉えるために、

自傷体験の頻度を調べる質問紙を使用した。これにより、自傷行為ではなく自傷傾向を測定したこととなる。そのため、以下自傷傾向質問紙、自傷傾向尺度という名称を用いる。

第4節 仮説

4-1. 自傷行為と青年期の自我発達上の危機状態

先述の長尾（1999, 2002）や岡田（2005）を参考にモデルを構築すると、自我の強さが青年期の自我発達と自傷傾向に影響をあたえていることが考えられる。また、青年期の親子の葛藤や自我同一性確立の葛藤（A水準）が自傷傾向に影響を与えていることが示唆される。また、不適応状態（B水準）と自傷傾向には相関関係があると考えられる。その結果、モデルとして Fig.1-4-1 のような図で説明することができるのではないかとと言える。

4-2. 自我発達の促進要因としての自傷傾向

自傷行為が習慣化する者が少ないことから、自傷行為は長尾・前田（1976）の述べる青年期の自我発達上の危機の中で適応的に乗り越えるのか、乗り越えられないのかという分岐点で起こる問題行動である可能性が示唆される。

そのため、危機を乗り越えたことによって自我の確立が促進されるのであれば、自傷行為の現在経験者と過去経験者と未経験者の間で自我の強度や自我発達上の危機状態得点に違いが表れてくることが考えられる。その中で、自傷過去経験者は、自傷やもしかしたら他の方法などを用いて、青年期の発達上の危機状態と対峙し終わっているのではないだろうかと考えられる。そのため、過去に経験している者は他のものより自我が強く、青年期の自我発達上の危機状態 A 水準得点や B 水準得点が低いのではないだろうかと考えられた。反して、現行経験者は青年期の自我発達上の危機状態にあり、青年期の自我発達上の危機状態 A 水準・B 水準得点が他より高く、自我強度が弱いのではないだろうかと考えられる。また、未経験者は、自傷以外の方法で青年期の発達上の危機状態と対峙しているのだと思われる。その中には、対峙している最中の者、対峙し終わった者が含まれるであろうことが考えられる。そのため、現行経験者と過去経験者の間に位置するのではないだろうかと考えられる。

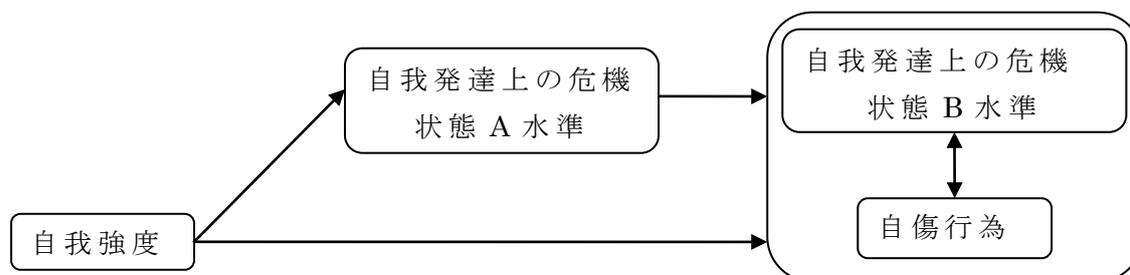


Fig.1-4-1 仮説のパス・ダイアグラム

第 5 節 本研究の目的

以上のことをふまえ、本研究の目的として以下の 4 点があげられる。

- ① 青年期の自我発達上の危機状態 B 水準において、不登校とは異なる問題をもつ青年に対しても検討が行えるのか自傷傾向を用いて確認を行う。
- ② 青年期の自我発達上の危機状態 A 水準から B 水準への心理過程において、自我同一性の課題が最も顕著になる 18 歳以降の後期青年期でも先行研究 (Fig.1-2-1) と同様の自我強度の弱さから、青年期の自我発達上の危機状態 A 水準、そして B 水準へと至る心理過程が認められるかの検討を行う。
- ③ 仮説の図 (Fig.1-4-1) で示した通りの関係がみられるのかどうかを検討する。
- ④ 危機を乗り越えて自我が強くなるという説を確認するために、自我の強さの程度・青年期の自我発達上の危機状態 A 水準得点において、自傷現行経験者・過去経験者・未経験者の間の差を検討する。

これらを研究することは、発達段階における理解や援助を考察する上での一助となることが考えられる。

第 2 章 調査研究

第 1 節 調査方法

1-1.調査時期

2011年7月7日から25日にかけて本調査を行った。また、自我強度の信頼性を確認するため、2011年11月14日から2012年1月6日にかけて再調査を行った。

1-2.調査対象

関西福祉科学大学に通う大学生 820 名（男性 273 名、女性 557 名）。

1-3.使用尺度

1)基礎データ

性別、年齢、学部、学年を尋ねた。

2)青年期の自我発達上の危機状態尺度（長尾，1989）

A 水準と B 水準の 2 種類の尺度から構成される。

A 水準は自我同一性の発達を問う 26 項目・7 因子からなり、「全くそのとおりである」から「全くそうでない」までの 5 件法の尺度である。B 水準は不適應を問う 24 項目・7 因子からなり、「あてはまる」から「あてはまらない」までの 5 件法の尺度からなる。

3)自我強度尺度（長尾，2007）

自我の強さについて問う尺度であり、24 項目・4 因子からなり、「あてはまる」から「あてはまらない」までの 5 件法による。

4)自傷傾向質問紙（岡田，2002，2003，2005，2010）

自分を傷つける頻度について問う尺度であり、29 項目・1 因子からなり、「一日に何度もする」から「したことが一度もない」までの 8 件法からなる。

1-4.質問紙の改変点

青年期の自我発達上の危機状態尺度のうちの B 水準尺度（長尾，1989）と自我強度尺度（長尾，2007）は本来 3 件法であった。しかし、自我同一性拡散の状態にある青年に 3 件法で回答を求めたとしても、はい・いいえをはっきりと選ぶことができずに、中間の数字を選んでしまう回答者が多いことが予想された。このため、選択肢を増やし 5 件法で回答を求めることで中間項に回答が集中する問題を避けた。

また、自傷に関する質問紙で 1 項目の「嫌われるとわかっているのにしてしまおう」という表現を現在の学生に合うように「嫌われるとわかっていることをしてしまおう」との改変を行った。

1-5.調査手続き

配布後、「質問紙は全部で 8 ページありますのでご確認をお願いします。質

問項目が多いので、記入漏れを防ぐために赤ペンで記入していただければと思います。」とアナウンスした後、調査用紙の表紙を読みあげ、「デリケートな質問が含まれますので、隣の人と見せ合ったり、相談したりせず、個人で回答してください。また、記入している最中で答えたくなくなった場合は途中で回答を中断していただいてもかまいません。」と伝えた。さらに、後半にさしかかったのを確認し、最後の携帯電話の下4桁の記入について、この調査が再調査を行うので同一人物である・ないという確認をしたいこと、個人を特定するためのものではないことを伝え、記入を求めた。

1-6.倫理的配慮

所属する大学院の倫理委員会の承認を得て、対象者の調査への協力は任意とした。回答中は他者と見せあわないようにということと、気分が悪くなった者は途中で回答をやめるように教示を行った。また、最後の質問として、気晴らし方法を記入してもらい、それを想起することにより嫌な気持ちのまま調査が終わらないようにした。調査用紙は個人情報保護の損種に基づき厳重に管理し、「集計・分析」終了後にシュレッダーにて廃棄した。

1-7.回収したデータに関して

1)質問項目の欠損データに関して

基礎データに欠損があった場合、データを破棄した。

青年期の自我発達上の危機状態尺度（長尾，1989）、自我強度尺度（長尾，2007）、自傷質問紙（岡田，2002，2003，2005，2010）のいずれかに欠損した回答のある場合、欠損した回答のある尺度に関しては統計処理を行わず、他の欠損していない尺度同士の統計のみに使用した。

2)携帯電話の下4桁の欠損データに関して

再調査において携帯電話の下4桁が欠損データであった場合、新規の被験者として扱った。

3)携帯電話の下4桁の重複に関して

携帯電話の下4桁が重複した場合、性別・年齢・学部・学年といった基礎データを元に同一人物であるか確認を行った。このとき、再調査で性別・学部・学年が同一であり、年齢が1歳多いのであれば、誕生日を迎えた同一人物であると解釈した。

4)重複した回答者に関して

アンケート用紙から本調査もしくは再調査の中で重複して回答したと認められた場合、統計には最初に回答した方のデータを用い、後に回答したデータは破棄した。また、最初に回答したデータに欠損があり、2度目に回答したデータに欠損がなかった場合2度目の調査データを統計処理に使用した。

5)再調査で新たに得られたデータに関して

再調査の時に初めて回答したと認められた場合、そのデータは本調査データとして扱った。

第 2 節 分析方法

2-1.基礎データ

まず、調査の有効回答がどのような属性をもっているのか確認するために男女比、学年、年齢を度数分布で表わす。

2-2.因子分析

先行研究と因子が一致するのかどうか、確認として各尺度の因子分析を行う。この時、長尾（2005）は、因子分析を主因子法・Varimax 回転、因子負荷量.35 以上を有効として分析を行っていたので同様の処理を行う。

2-3.性差と学年差の検討

先行研究と特徴が一致するのかが確認するために性差と学年差について 2 元配置の分散分析を用いて確認を行う。

2-4.相関分析

青年期の自我発達上の危機状態尺度 A 水準・B 水準得点、自我強度得点、自傷傾向得点それぞれの間でどのような関係がみられるのかが確認するために相関分析を行う。

2-5.重回帰分析

相関関係が認められた場合、重回帰分析を行い、仮説（Fig.1-4-1）が認められるのかが確認を行う。

2-6.自傷経験 3 群の群分け

自傷経験によって未経験群、過去経験群、現行経験群に群分けを行う。基準として、自傷傾向尺度の項目「19.刃物で体を傷つける（引っ掻く）・切る・刺す」の項目を用いた。この質問項目において、1（したことが一度もない）を選択した者を自傷未経験者、2（2～3 年に数回したことがある）を選択した者を自傷過去経験者、3（1 年に数回する）～8（一日に何度もする）を選択した者を自傷現行経験者とし、自傷経験 3 群に分類した。

2-7.自傷経験 3 群を用いた分散分析（全データと標本データ）

自傷経験 3 群において、青年期の自我発達上の危機状態 A 水準・B 水準得点、自我強度得点それぞれにどのような差があるのかが分散分析を用いて確認を行う。自傷経験 3 群において自傷未経験群と自傷経験群とでは標本数に大きな差が生じる可能性がある。そのため、まず全データを用いて分散分析を行う。その後ランダム抽出を用いて自傷経験 3 群の標本数をそろえ、分散分析を行う。そして、全データを用いた場合と標本データを用いた場合で結果が異なっていた場合、標本データで得られた結果を用いて考察を行う。どちらの結果も同様であったのならば、全データで得られた結果を使用して考察を行うこととする。

第 3 章 結果

第 1 節 記述統計

有効回答数は 781 であった。うち、本研究の対象ではない 23 歳以上を処理対象からはずし、残った 758 のデータの度数分布を調べた。その男女比を Table3-1-1 と Fig.3-1-1、学年比を Table3-1-2 と Fig.3-1-2、年齢比を Table3-1-3 と Fig.3-1-3 に示す。4 年生の学生数が 30 人に満たないのでこれからの分析から除外することとした。

Table3-1-1 本調査データの男女比

	度数	パーセント
男性	242	31.9
女性	516	68.1
合計	758	100.0

Table3-1-2 本調査データの学年比

	度数	パーセント
1 年	202	26.6
2 年	252	33.2
3 年	276	36.4
4 年	28	3.7
合計	758	100.0

Table3-1-3 本調査データの年齢比

	度数	パーセント
18 歳	81	10.7
19 歳	234	30.9
20 歳	270	35.6
21 歳	144	19.0
22 歳	29	3.8
合計	758	100.0

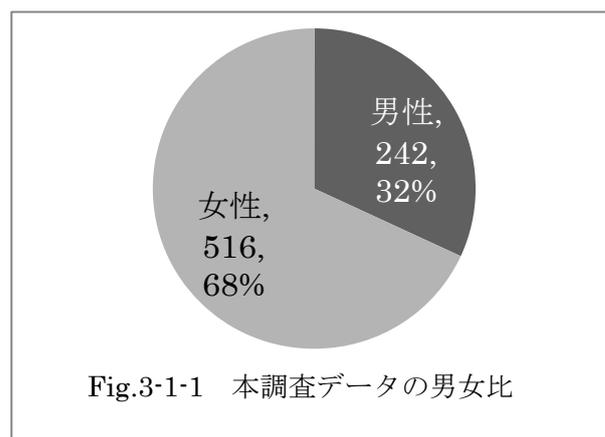


Fig.3-1-1 本調査データの男女比

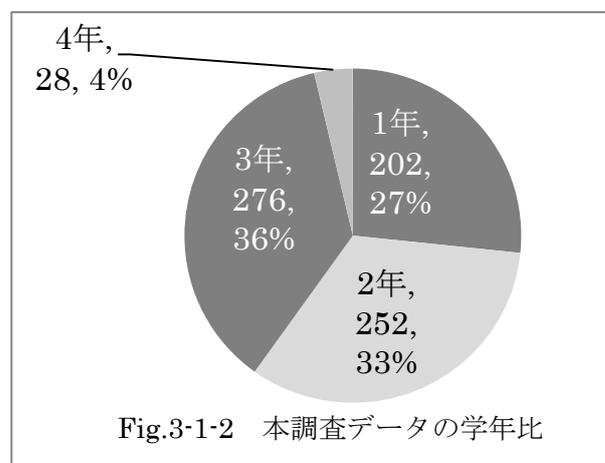


Fig.3-1-2 本調査データの学年比

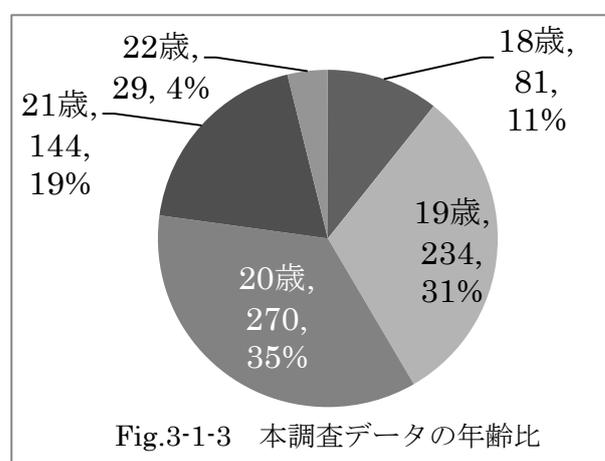


Fig.3-1-3 本調査データの年齢比

第2節 因子分析

青年期の自我発達上の危機状態尺度 A 水準・B 水準（以下、危機状態尺度 A 水準・危機状態尺度 B 水準と略す）、自我強度のそれぞれの得点について因子分析を行った。

2-1. 危機状態尺度 A 水準の因子分析

まず、危機状態尺度 A 水準 29 項目の平均値、標準偏差を算出した。そして、天井効果およびフロア効果を確認したがみられなかった。そのため、29 項目に対して長尾（1989）を参考に、主因子法による因子分析を行った。長尾（1989）同様に 7 因子を仮定して主因子法・Varimax 回転による因子分析を行ったが、成立しなかった。そのため、因子数を少なく設定して因子分析を行った結果、十分な因子負荷量（.35 以上）を示さなかった 6 項目を分析から除外し、21 項目 5 因子構造が妥当であった（Table3-2-1）。累積寄与率は 36.09%であった。

各因子は以下のように解釈された。第 1 因子は 7 項目で構成され、長尾（1989）において、「親とのアンビバレンス感情」因子、「親からの独立と依存のアンビバレンス」因子に含まれる項目で構成されていた。そのため、この因子を「親とのアンビバレンス」因子と名付けた。

第 2 因子は、5 項目で構成され、いずれも逆転項目であり、長尾（1989）において「同一性拡散」因子に含まれる項目で構成されていたので同様に「同一性拡散」因子とした。

第 3 因子は、4 項目で構成され、長尾（1989）の「自己収縮」因子と「決断力欠如」因子に含まれる項目で構成されていたので「自己収縮」因子とした。

第 4 因子は、2 項目で構成され、長尾（1989）において、「自己開示対象の欠如」因子と同様の項目で構成されていたので、「自己開示対象の欠如」因子とした。

第 5 因子は、2 項目からなり、長尾（1989）において「決断力欠如」因子に含まれる項目で構成されていたので「決断力欠如」因子とした。

Table3-2-1 危機状態A水準尺度※因子分析結果

※危機状態尺度 A水準	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	共通性
20.親と一しょにいてだけで何となく安心できる反面、自分をほうっておいてほしいという気持ちがある	.586	-.031	.173	.011	.060	.38
13.親にもっと理解され、愛してもらいたい反面、理解してもらえなくてもよいという気持ちもある	.575	.006	.072	.250	.016	.38
7.何かに迷っている時に、親に「これでいい」と聞きたい反面、聞かないで自分で解決したいと思う	.543	.053	-.015	.060	.039	.30
23.親の言うこと、考えていることは、正しいと信じられる反面、疑問も生じてくる	.510	-.040	.179	.015	.008	.29
19.うれしいこと、楽しいことは、まず親に報告したい気持ちもある反面、そのことを自分だけで大切にしたいという気持ちもある	.482	-.126	.142	.006	.123	.28
14.ひとりで決心がつきにくい時には、親の意見に従いたい反面、自分で決心したい気持ちもある	.481	.043	.075	-.125	.203	.30
6.困っている時や悲しい時に、親に気持ちをわかってもらいたい反面、わかってもらえなくてもよいという気持ちもある	.475	.097	.116	.178	-.042	.28
*21.決断力があるため、今、何かの決断を迫られても混乱せず、決断できるだろう	.034	.697	.013	-.039	.184	.52
*24.大切な決断を迫られた場合、私はいつもじっくり考えた上で、思い切りよく決断できる	-.141	.488	.058	.090	.181	.30
*10.私はこの社会では欠くことのできない存在だと思う	.018	.474	.187	.153	-.039	.29
*17.私は悪い友だちに左右されることなく、いつも正しい決断を下すことができる	.031	.433	.019	.025	.071	.19
* 3.私の生活はいきいきしているように思う	.004	.397	.300	.295	-.079	.34
25.今の自分は本当の自分ではないような気がする	.204	.137	.690	.153	.129	.58
26.人と一しょにいて、たまたま自分がいやになることがよくある	.253	.243	.544	.287	.046	.50
16.私には、「理想の自分」がたくさんあって、どれが本当になりたい自分なのかさっぱりわからない	.181	-.008	.460	.042	.221	.30
22.今、何かに追いつめられているような感じをもっていて、自由に動けない気持ちである	.245	.200	.401	.237	.077	.32
11.私には、おたがいに本当に理解し合える人は、ほとんどいないと思う	.147	.098	.125	.727	.157	.60
4.うちとけて話しができる人は、私にはあまりいないように思う	.062	.070	.191	.684	.096	.52
* 2.他人から「仲間外れにされている」と感じることはほとんどない	.018	.317	.107	.355	-.232	.29
1.今、自分の将来の進路について決断を迫られても何を基準にして考えたらいいかわからない	.172	.202	.116	.101	.494	.32
8.これまで自分自身で将来や進路した経験が少ないため、その決断ができる段階である	.087	.165	.253	.079	.463	.34
因子寄与	2.20	1.63	1.52	1.52	.76	7.63
寄与率	10.49	7.75	7.24	7.23	3.63	36.33
信頼性 (α)	.739	.640	.718	.636	.518	.803

因子1.親とのアンビバレンス、因子2.同一性拡散、因子3.自己収縮、因子4.自己開示対象の欠如、
因子5.決断力欠如

*は逆転項目

※以降、表や図においても青年期の自我発達上の危機状態尺度については略称を用いる。

2-2.危機状態尺度 B 水準の因子分析

まず、危機状態尺度 B 水準 24 項目の平均値、標準偏差を算出した。そして、天井効果およびフロア効果を確認した結果、7 項目にフロア効果がみられたため削除した。

そのため、17 項目に対して長尾（1989）を参考に、主因子法による因子分析を行った。主因子法・Varimax 回転による因子分析を行った結果、十分な因子負荷量（.35 以上）を示さなかった項目・複数因子に高い因子負荷量を示した項目を分析から除外すると、12 項目 3 因子構造が妥当であった（Table3-2-2）。累積寄与率は 36.09%であった。

各因子は以下のように解釈された。第 1 因子は 7 項目で構成され、長尾（1989）において、「緊張とその状況の回避」因子、「精神衰弱」因子に含まれる項目で構成されていた。そのため、この因子を「緊張と神経衰弱」因子と名付けた。

第 2 因子は、3 項目で構成され、いずれも逆転項目であり、長尾（1989）において、「身体的痛み」因子、「身体的疲労感」因子に含まれる項目で構成されていた。そのため、この因子を「身体的痛みと疲労感」因子と名付けた。

第 3 因子は、2 項目で構成され、いずれも逆転項目であり、長尾（1989）において「閉じこもり」因子に含まれる項目で構成されていたので同様に「閉じこもり」因子とした。

Table3-2-2 危機状態 B 水準尺度因子分析結果

危機状態尺度 B 水準	因子 1	因子 2	因子 3	共通性
9.すぐ感情を傷つけられやすい	.707	.199	.168	.57
21.ときどき、頭に浮かんでくるつまらない考えに何日も悩まされる	.636	.188	.073	.44
8.いつも緊張してイライラしている	.617	.184	.179	.45
20.何か恐ろしい考えがいつも頭に浮かぶ	.579	.190	.081	.38
2.何かにつけてよく心配する	.558	.162	-.026	.34
7.外に出ると（バスや店などで）、人から見られているのが気になる	.542	.007	.152	.32
1.ときどき、たまらなく家出したくなる	.414	.106	-.129	.20
* 3.心臓や胸の苦しみを覚えることはほとんどない	.242	.610	.032	.43
*10.体のどこかが痛むようなことはほとんどない	.143	.547	.125	.34
*13.疲れやすいほうではない	.078	.410	.157	.20
*18.学校はおもしろいので家にばかりいたくない	-.012	.135	.749	.58
* 5.学校へ行きたくない気持ちが生じることはあまりない	.216	.254	.467	.33
因子寄与	2.53	1.11	.933	4.57
寄与率	21.07	9.21	7.78	38.06
信頼性	.790	.562	.560	.783

因子 1.緊張と神経衰弱、因子 2.身体的痛みと疲労感、因子 3.閉じこもり

*は逆転項目

2-3. 自我強度尺度の因子分析

まず、自我強度尺度 24 項目の平均値、標準偏差を算出した。そして、天井効果およびフロア効果を確認したがどちらの効果も見られなかった。そのため、24 項目に対して長尾（2007）を参考に、主因子法による因子分析を行った。主因子法・Varimax 回転による因子分析を行った結果、十分な因子負荷量（.35 以上）を示さなかった項目と複数因子に高い因子負荷量を示した 5 項目を分析から除外すると、19 項目 4 因子構造が妥当であった（Table3-2-3）。累積寄与率は 35.21%であった。また、今回、因子分析の中で項目 18 は逆転項目となった。

各因子は以下のように解釈された。第 1 因子は 7 項目で構成され、いずれも逆転項目であり、長尾（2007）において、「欲求不満耐久度」因子に含まれる項目で構成されていた。そのため、この因子を「欲求不満耐久度」と名付けた。

第 2 因子は、5 項目で構成され、長尾（2007）を参考に、この因子を「適応的自己」因子と名付けた。

第 3 因子は、3 項目で構成され、いずれも逆転項目であり、長尾（2007）において「自我同一性の確立」因子に含まれる項目で構成されていたので同様に「自我同一性の確立」因子とした。

第 4 因子は、2 項目で構成され、いずれも逆転項目であり、長尾（2007）を参考に「現実的自己」因子とした。

Table3-2-3 自我強度尺度因子分析結果

自我強度尺度	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	共通性
*21.私は、いい出したら人のいうことを聞かないところがある	.645	-.078	.034	.159	.45
* 5.私はよく切れやすい	.543	.142	.244	.097	.38
*23.私は、直接、他者へ攻撃性を示すので嫌われやすい	.537	.019	.156	.124	.33
*17.私は、がんこだとよくいわれる	.473	-.147	.070	.069	.26
1.私は思いどおりにならないとき、がまんできるほうである	.410	.258	.033	-.154	.26
*24.したいことをこらえるのが苦手だ	.399	.003	.008	.189	.20
* 9. 私は融通性がないほうだと思う	.397	.254	.264	.108	.30
22.私は、ものごとを正しく、客観的にとらえることができる	-.003	.724	.081	-.011	.53
15.私は、現実を正しく見抜けるほうだ	.030	.615	.062	.008	.38
8.問題に直面したとき、合理的解決法を知っているほうである	-.029	.543	.161	-.138	.34
12.私は、人からあてにされ、安定感のあるタイプである	.021	.486	.035	.046	.24
* 6. 人の気持ちがわからないほうだと思う	.317	.366	.193	.225	.32
*10.時々、自分のことがさっぱりわからなくなる	.104	.106	.818	.186	.73
*14.自分がどういう人間なのか、自分の性格がまだよくわからない	.109	.205	.572	.204	.42
*11.私は、いつも緊張している	.226	.083	.434	.113	.26
* 4.夢や空想は、自分にとっては今、生きていることよりも関心がある	.047	.024	.081	.610	.38
*19.あまり現実の世界に関心がなく、自分の世界を大切にす	.144	-.057	.164	.591	.40
*18.道徳的に許されないことを他の方法（趣味や気ばらし）でごまかす	.135	-.060	.131	.402	.20
* 7.私は、いつもものの考え方が主観的、空想的だといわれる	.338	.159	.133	.386	.30
因子寄与	2.04	1.84	1.49	1.32	6.69
寄与率	10.73	9.69	7.84	6.95	35.21
信頼性 (α)	.703	.678	.681	.616	.784

因子 1 .欲求不満耐久度、因子 2.適応的自己、因子 3.自我同一性の確立、因子 4.現実的自己

*は逆転項目

2-4.再検査

1) 再検査の度数分布

再検査の有効回答は、男性 54 名、女性 95 名の計 149 名であった。

再検査により自我強度尺度の各項目の本調査と再調査の得点の相関関係を確認したところ、最も低いもので.377 であり、他はそれ以上であった。そのため、信頼性は安定しているとみなした。

第3節 性と学年による比較

3-1.性別と学年別の平均値と標準偏差

危機状態 A 水準得点・B 水準得点、自我強度得点、自傷傾向得点について、学年、性別ごとの平均点・標準偏差を算出した (Table3-3-1)。

3-2.危機状態 A 水準における性と学年による分散分析

男女間や学年間において危機状態 A 水準得点に差が存在するのか確かめるために二元配置の分散分析を行った。その結果、男女間・学年間に有意な差はみられなかった (Table3-3-2)。

Table3-3-1 性別と学年別の平均と標準偏差

		1年	2年	3年
危機状態 A 水準得点	男性	65.96 (10.83)	63.51 (9.44)	63.81 (11.11)
	女性	64.37 (9.97)	65.42 (11.16)	65.68 (9.57)
危機状態 B 水準得点	男性	34.18 (8.86)	33.55 (7.46)	34.63 (8.80)
	女性	37.10 (8.19)	36.42 (8.89)	37.27 (8.40)
自我強度尺 度得点	男性	66.92 (23.52)	80.07 (30.43)	82.57 (27.80)
	女性	67.27 (21.52)	72.06 (22.18)	71.14 (22.28)
自傷傾向尺 度得点	男性	59.85 (12.34)	58.32 (9.89)	57.81 (9.69)
	女性	59.00 (9.90)	58.42 (9.93)	57.82 (9.04)

Table3-3-2 危機状態 A 水準における性と学年による分散分析結果

	平方和	自由度	平均平方	F 値
性別	77.14	1	77.14	.72
学年	43.20	2	21.60	.20
性別 * 学年	352.85	2	176.42	1.64
誤差	76528.98	712	107.49	

**p<.01

3-3.危機状態 B 水準における性差と学年差

1)危機状態 B 水準における性と学年による分散分析

男女間や学年間において危機状態 B 水準得点に差が存在するのか確かめるために分散分析を行った。その結果、性の主効果 (F=16.09、df=1、p<.01) がみられた (Table3-3-3)。学年に主効果はみられなかった。さらに、交互作用もみられなかった。

2)危機状態 B 水準における性差

危機状態 B 水準における性差について Tukey の方法を用いて下位検定を行った。その結果、女性の方が男性よりも危機状態 B 水準得点が高いことが証明された (Table3-3-4)。

3-4.自我強度における性差と学年差

男女間や学年間において自我強度得点に差が存在するのか確かめるために分散分析を行った。その結果、性と学年の主効果と交互作用はみられなかった (Table3-3-5)。

Table3-3-3 危機状態 B 水準における性と学年による分散分析結果

	平方和	自由度	平均平方	F 値
性別	1159.67	1	1159.67	16.09**
学年	104.08	2	52.04	.72
性別 * 学年	2.26	2	1.13	.02
誤差	51113.39	709	72.09	

**p<.01

Table3-3-4 危機状態 B 水準における性差の下位検定

性別	人数	平均値	SD	平均の差	標準誤差
男性	223	34.19	8.41	-2.08**	.70
女性	492	36.91	8.51		

**p<.01

Table3-3-5 自我強度における性と学年による分散分析結果

	平方和	自由度	平均平方	F 値
性別	8.41	1	8.41	.086
学年	246.12	2	123.06	1.26
性別 * 学年	23.30	2	11.65	.12
誤差	68884.58	706	97.57	

**p<.01

3-5. 自傷傾向における性差と学年差

1) 自傷傾向における性と学年による分散分析

性別間や学年間において自傷傾向得点に差が存在するのかわかめるために分散分析を行った。その結果、性による主効果 ($F=10.14$ 、 $df=1$ 、 $p<.01$) と学年による主効果 ($F=8.91$ 、 $df=2$ 、 $p<.01$) がみられた (Table3-3-6)。交互作用はみられなかった。

2) 自傷傾向における性差

自傷傾向における性差について Tukey の方法を用いて下位検定を行った。その結果、男性の方が女性よりも自傷傾向得点 5%水準で有意に高いことが証明された (Table3-3-7)。

3) 自傷傾向における学年差

自傷傾向における学年差について Tukey の方法を用いて下位検定を行った。その結果、1年と2年に5%水準で有意な差、1年と3年に1%水準で有意な差が認められた (Table3-3-8)。

Table3-3-6 自傷傾向における性と学年による分散分析結果

	平方和	自由度	平均平方	F 値
性別	5797.12	1	5797.12	10.14**
学年	10188.12	2	5094.06	8.91**
性別 * 学年	3324.60	2	1662.30	2.91
誤差	396919.84	694	571.93	

** $p<.01$

Table3-3-7 自傷傾向における性差の下位検定

性別	人数	平均値	SD	平均の差	標準誤差
男性	217	76.52	1.67	6.36*	2.00
女性	483	70.16	1.09		

* $p<.05$

Table3-3-8 自傷傾向における学年差の下位検定

学年	人数	平均値	SD	平均の差	標準誤差	
1年	195	67.10	1.93	2年	-8.97*	2.58
				3年	-9.76**	2.46
2年	240	76.07	1.72	1年	8.97*	2.58
				3年	-.79	2.30
3年	265	76.86	1.53	1年	9.76**	2.46
				2年	.79	2.30

* $p<.05$ ** $p<.01$

第4節 自傷傾向尺度における項目内差

自傷傾向尺度について項目内性差の確認を行った結果、29項目中16項目に性差が認められた (Table3-4-1)。

Table3-4-1 自傷傾向尺度項目内性差のt検定結果

項目	男性 人数	男性 平均 (SD)	女性 人数	女性 平均 (SD)	t 値	P
1.爪をかむ	226	2.38(2.02)	500	1.96(1.74)	3.12	**
2.手や足、顔をつねる	226	2.77(1.88)	500	2.60(1.92)	1.17	n.s
3.手や足を噛む	225	1.85(1.58)	499	1.60(1.31)	2.11	*
4.わざと怖い番組をみる	226	2.92(1.78)	499	2.22(1.36)	5.23	**
5.指をしゃぶる	224	1.39(1.04)	499	1.16(.62)	3.09	**
6.体毛を抜く	225	4.23(2.26)	494	4.51(2.18)	-1.56	n.s
7.煙草を吸う	226	2.63(2.71)	500	1.39(1.37)	6.52	**
8.皮膚に爪を立てたり引っ掻いたりする	225	2.83(2.27)	499	2.33(1.91)	2.87	**
9.声がかれるほど歌ったり叫んだりする	225	2.97(1.92)	500	2.38(1.63)	4.06	**
10.体を血が出るほど掻く	226	1.92(1.63)	499	1.79(1.54)	1.02	n.s
11.目をこする	226	5.37(2.05)	498	5.63(1.90)	-1.71	n.s
12.骨を鳴らす	225	5.15(2.61)	498	4.31(2.74)	3.96	**
13.物を殴ったり、蹴ったりする	224	2.94(1.90)	500	2.28(1.59)	4.55	**
14.唇をかむ	226	4.08(2.38)	499	3.96(2.45)	.64	n.s
15.頭を壁や柱にぶつける	226	1.91(1.52)	501	1.50(1.06)	3.66	**
16.まばたきをたくさんする	226	3.63(2.48)	501	3.92(2.59)	-1.41	n.s
17.ピアスを開ける	226	1.48(1.36)	500	1.48(.82)	.00	n.s
18.髪の毛をかきむしる	226	3.22(2.34)	501	2.56(1.99)	3.67	**
19.刃物で体を傷つける (引っ掻く)・切る・刺す	226	1.33(1.02)	500	1.28(.86)	.65	n.s
20.無理やり食べる	226	2.30(1.69)	501	2.44(1.76)	-.99	n.s
21.無理やり吐く	226	1.54(1.14)	501	1.31(.99)	2.58	*
22.物を食べない	226	1.93(1.69)	501	1.92(1.47)	.08	n.s
23.電車のホームや高いところへ行くと吸いこまれそうになる	226	1.95(1.71)	501	1.74(1.56)	1.64	n.s
24.意味もなく歩き回る	226	2.70(2.13)	500	2.29(1.83)	2.50	*
25.血を見るのが好き	226	1.75(1.68)	501	1.37(1.12)	3.15	**
26.顔や頭をなぐる	226	1.62(1.47)	501	1.27(.87)	3.41	**
27.酒を飲む	226	3.98(1.99)	501	3.69(1.86)	1.90	n.s
28.嫌われるとわかっていることをしてしまう	226	2.66(1.98)	501	2.12(1.61)	3.62	**
29.かさぶたやささくれを取る	226	3.23(2.03)	501	3.36(1.98)	-.84	n.s

*p<.05 **p<.01

第5節 各尺度の相関関係

5-1.各尺度得点の相関関係

危機状態 A 水準・B 水準得点、自我強度得点、自傷傾向得点それぞれの相関関係を男女、学年全体で調べた。その結果、危機状態 A 水準得点と B 水準得点の間に中程度の正の相関 ($r=.622$ 、 $p<.01$) と、危機状態 A 水準得点と自我強度得点の間に中程度の負の相関 ($r=-.536$ 、 $p<.01$) が認められた。さらに、危機状態 A 水準得点と自傷傾向得点の間に正の弱い相関 ($r=.247$ 、 $p<.01$) が認められた。また、危機状態 B 水準得点と自我強度得点に中程度の負の相関 ($r=-.540$ 、 $p<.01$) と、危機状態 B 水準得点と自傷傾向得点との間に弱い正の相関 ($r=.373$ 、 $p<.01$) が認められた。そして、自我強度得点と自傷傾向得点の間に弱い負の相関 ($r=-.311$ 、 $p<.01$) が認められた (Table3-5-1)。

Table3-5-1 各尺度得点の相関関係結果

	危機状態 B 水準	自我強度	自傷傾向
危機状態 A 水準	.622**	-.536**	.247**
危機状態 B 水準		-.540**	.373**
自我強度			-.311**

** $p<.01$

5-2.男性における各尺度の相関関係

男性における危機状態 A 水準・B 水準得点、自我強度得点、自傷傾向得点それぞれの相関関係を学年全体で見た (Table3-5-2)。その結果、危機状態 A 水準得点と B 水準得点の間に中程度の正の相関 ($r=.695$ 、 $p<.01$) と、危機状態 A 水準得点と自我強度得点の間に中程度の負の相関 ($r=-.605$ 、 $p<.01$) が認められた。さらに、危機状態 A 水準得点と自傷傾向得点の間に相関がほとんどない ($r=.160$ 、 $p<.05$) ことが認められた。また、危機状態 B 水準得点と自我強度得点に中程度の負の相関 ($r=-.590$ 、 $p<.01$) と、危機状態 B 水準得点と自傷傾向得点との間に弱い正の相関 ($r=.290$ 、 $p<.01$) が認められた。そして、自我強度得点と自傷傾向得点の間に弱い負の相関 ($r=-.277$ 、 $p<.01$) が認められた。

5-3.女性における各尺度得点の相関関係

女性における危機状態 A 水準・B 水準得点、自我強度得点、自傷傾向得点それぞれの相関関係を学年全体で見た (Table3-5-3)。その結果、危機状態 A 水準得点と B 水準得点の間に中程度の正の相関 ($r=.591$ 、 $p<.01$) と、危機状態 A 水準得点と自我強度得点の間に中程度の負の相関 ($r=-.503$ 、 $p<.01$) が認められた。さらに、危機状態 A 水準得点と自傷傾向得点の間に正の弱い相関 ($r=.318$ 、 $p<.01$) が認められた。また、危機状態 B 水準得点と自我強度得点に中程度の負の相関 ($r=-.528$ 、 $p<.01$) と、危機状態 B 水準得点と自傷傾向得点との間に中程度の正の相関 ($r=.476$ 、 $p<.01$) が認められた。そして、自我強度得点と自傷傾向得点の間に弱い負の相関 ($r=-.369$ 、 $p<.01$) が認められた。

Table3-5-2 男性における各尺度得点の相関関係結果

	危機状態B水準	自我強度	自傷傾向
危機状態A水準	.695**	-.605**	.160*
危機状態B水準		-.590**	.290**
自我傾向			-.227**

* $p<.05$ ** $p<.01$

Table3-5-3 女性における各尺度得点の相関関係結果

	危機状態B水準	自我強度	自傷傾向
危機状態A水準	.591**	-.503**	.318**
危機状態B水準		-.528**	.476**
自我傾向			-.369**

* $p<.05$ ** $p<.01$

5-4.男性・女性における相関関係の特徴

男女ともに類似していた点として (Table3-5-4)、危機状態 A 水準得点と B 水準得点の間に中程度の正の相関、危機状態 A 水準得点と自我強度得点の間に中程度の負の相関、危機状態 B 水準得点と自我強度得点に中程度の負の相関、自我強度得点と自傷傾向得点の間に弱い負の相関、それぞれが認められたことがあげられる。

男女間で異なっていた点として (Table3-5-5)、男性は危機状態 A 水準得点と自傷傾向得点の間に相関がほとんどないのに対して、女性は危機状態 A 水準得点と自傷傾向得点の間に正の弱い相関が認められた。また、男性は危機状態 B 水準得点と自傷傾向得点との間に弱い正の相関認められたのに対して、女性は危機状態 B 水準得点と自傷傾向得点との間に中程度の正の相関が認められた点があげられる。

Table3-5-4 男女間で類似していた相関関係

尺度①	尺度②	関係	程度
危機状態 A 水準得点	危機状態 B 水準得点	正	中程度
危機状態 A 水準得点	自我強度得点	負	中程度
危機状態 B 水準得点	自我強度得点	負	中程度
自我強度得点	自傷傾向得点	負	弱い

Table3-5-5 男女間で異なっていた相関関係

尺度①	尺度②	性別	関係	程度
危機状態 A 水準得点	自傷傾向得点	男性	ほとんどない	
		女性	正	弱い
危機状態 B 水準得点	自傷傾向得点	男性	正	弱い
		女性	正	中程度

第 6 節 仮説を検証するための重回帰分析

第 4 節の仮説 (Fig.1-4-1) を元に自我強度・危機状態 A 水準・危機状態 B 水準・自傷傾向がそれぞれにどのような影響を与えているのかを検討した。相関関係で男女によって差があったため、男女別に重回帰分析を行った。結果は Fig.3-6-1 と Fig.3-6-2 に示す。相関も示してあるが、有意でなかったものは記載していない。

6-1.男性の場合

男性では、自我強度から危機状態 A 水準に対して重回帰の決定係数 $R^2 = .55$ において標準化係数 $\beta = -.30$ ($p < .01$) で影響を与えているという結果を得た。また、危機状態 A 水準から危機状態 B 水準に対して重回帰の決定係数 $R^2 = .56$ において標準化係数 $\beta = .53$ ($p < .01$)、自我強度から危機状態 B 水準に対して標準化係数 $\beta = -.23$ ($p < .01$) で影響を与えていることが確認された。しかし、自我強度から自傷傾向に対して重回帰の決定係数 $R^2 = .11$ において標準化係数 $\beta = -.08$ ($p = .37$) であり、影響を与えているとは確認できなかった (Fig.3-6-1)。

6-2.女性の場合

女性では、自我強度から危機状態 A 水準に対して重回帰の決定係数 $R^2 = .39$ において標準化係数 $\beta = -.27$ ($p < .01$) で影響を与えているという結果を得た。また、危機状態 A 水準から危機状態 B 水準に対して重回帰の決定係数 $R^2 = .48$ において標準化係数 $\beta = .37$ ($p < .01$)、自我強度から危機状態 B 水準に対して標準化係数 $\beta = -.26$ ($p < .01$) で影響を与えていることが確認された。さらに、自我強度から自傷傾向に対して重回帰の決定係数 $R^2 = .24$ において標準化係数 $\beta = -.16$ ($p < .01$) であり、影響を与えていることが確認された (Fig.3-6-2)。

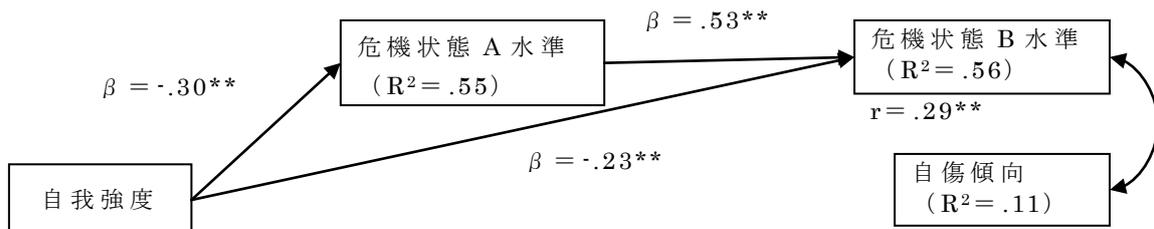


Fig.3-6-1 男性における各尺度における重回帰分析結果

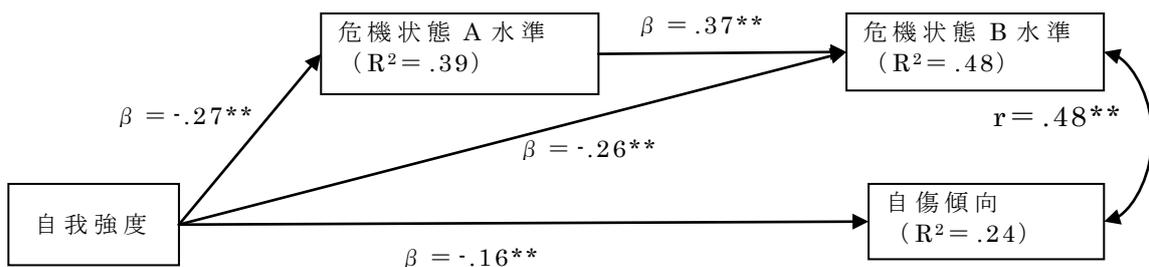


Fig.3-6-2 女性における各尺度における重回帰分析結果

第 7 節 自傷経験 3 群による尺度得点の差

第 2 章第 2 節 2-6 で述べた方法で自傷行為未経験群、過去経験群、現行経験群に群分けを行った。

その結果、未経験者が男性 196 名、女性 430 名の合計 726 名、過去経験者が男性 14 名、女性 40 名の合計 54 名、現行経験者が男性 16 名、女性 30 名の合計 46 名であった (Table3-7-1)。

自傷傾向と自傷経験 3 群で、それぞれ危機状態 A 水準・B 水準・自我強度との関係に差があるのか確認する。そのために、自傷経験 3 群で危機状態 A 水準・B 水準・自我強度得点それぞれの分散分析を行った。その際、3 群間にデータ数の偏りがあったため、全データによる分析と、無作為抽出したデータによる分析において結果が異なるのかの確認も行った。

Table3-7-1 自傷経験 3 群における度数分布

	男性	女性	合計
未経験者	196	430	726
過去経験者	14	40	54
現行経験者	16	30	46

7-1.自傷経験 3 群による危機状態 A 水準・B 水準、自我強度得点の分散分析(全データ)

1)自傷経験 3 群による危機状態 A 水準の分散分析

自傷経験 3 群による危機状態 A 水準得点の差を検討するにあたり、はじめに分散性が成り立っていることを確認した。次に 1 元配置の分散分析を行った結果、 $F=12.17(p<.01)$ なので、自傷の経験によって差が認められた(Table3-7-2)。

2)危機状態 A 水準得点における自傷経験 3 群差

危機状態 A 水準における自傷の経験差について Tukey の方法を用いて下位検定を行った。その結果、過去経験者の方が未経験者よりも危機状態 A 水準得点が 1% 水準で有意に高いことが証明された (Table3-7-3, Fig.3-7-1)。

Table3-7-2 自傷経験 3 群による危機状態 A 水準得点の分散分析結果

	平方和	自由度	平均平方	F 値
グループ間	2542.02	2	1271.01	12.17**
グループ内	74465.14	713	104.44	

* $p<.05$ ** $p<.01$

Table3-7-3 危機状態 A 水準得点における自傷経験 3 群間の下位検定

	平均値	標準誤差	比較対象	平均値の差	標準誤差
未経験者	64.07	0.44	過去経験者	-6.52**	1.65
			現行経験者	-2.87	1.65
過去経験者	70.59	1.59	未経験者	6.52**	1.65
			現行経験者	3.65	2.25
現行経験者	66.94	1.59	未経験者	2.87	1.65
			過去経験者	-3.65	2.25

* $p<.05$ ** $p<.01$

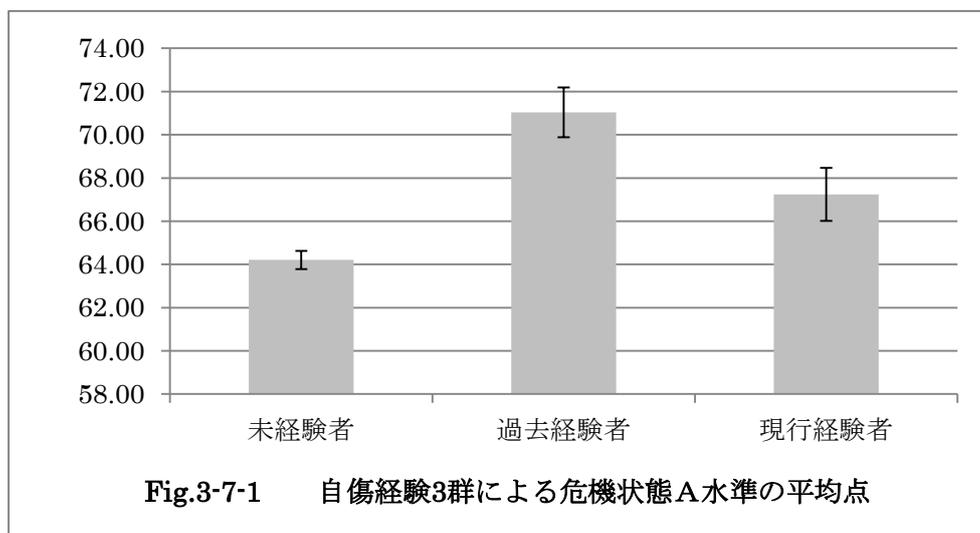


Fig.3-7-1 自傷経験3群による危機状態A水準の平均点

※グラフには標準誤差を示してある。

3)自傷経験 3 群による危機状態 B 水準の分散分析

自傷経験 3 群による危機状態 B 水準を検討するにあたり、危機状態 B 水準得点においては第 3 節で男女差がみられたことから、2 元配置の分散分析を行った。結果、 $F=6.16$ ($p<.01$) で男女差が認められ、さらに $F=25.39$ ($p<.01$) で、自傷の経験によっても差が認められた。また、交互作用には有意な差はみられなかった (Table3-7-4, Fig.3-7-2)。

4)危機状態 B 水準得点における自傷の経験差

危機状態 B 水準得点における自傷経験 3 群について Tukey の方法を用いて下位検定を行った。その結果、過去経験者と現行経験者の方が未経験者よりも青年期の自我発達上の危機 B 水準得点が 1% 水準で有意に高いことが証明された (Table3-7-5, Fig.3-7-2)。

Table3-7-4 危機状態 B 水準得点における性と学年による分散分析結果

	平方和	自由度	平均平方	F 値
自傷経験	3364.43	2	1682.22	25.39**
性別	407.91	1	407.91	6.16**
自傷経験 * 性別	12.57	2	6.28	0.09
誤差	46909.76	708	66.26	

** $p<.01$

Table3-7-5 危機状態 B 水準得点における自傷の経験間の下位検定

	平均値	標準誤差	比較対象	平均値の差	標準誤差
未経験者	34.61	0.35	過去経験者	-7.47**	1.32
			現行経験者	-6.31**	1.34
過去経験者	42.08	1.27	未経験者	7.47**	1.32
			現行経験者	1.15	1.81
現行経験者	40.92	1.29	未経験者	6.31**	1.34
			過去経験者	-1.15	1.81

* $p<.05$ ** $p<.01$

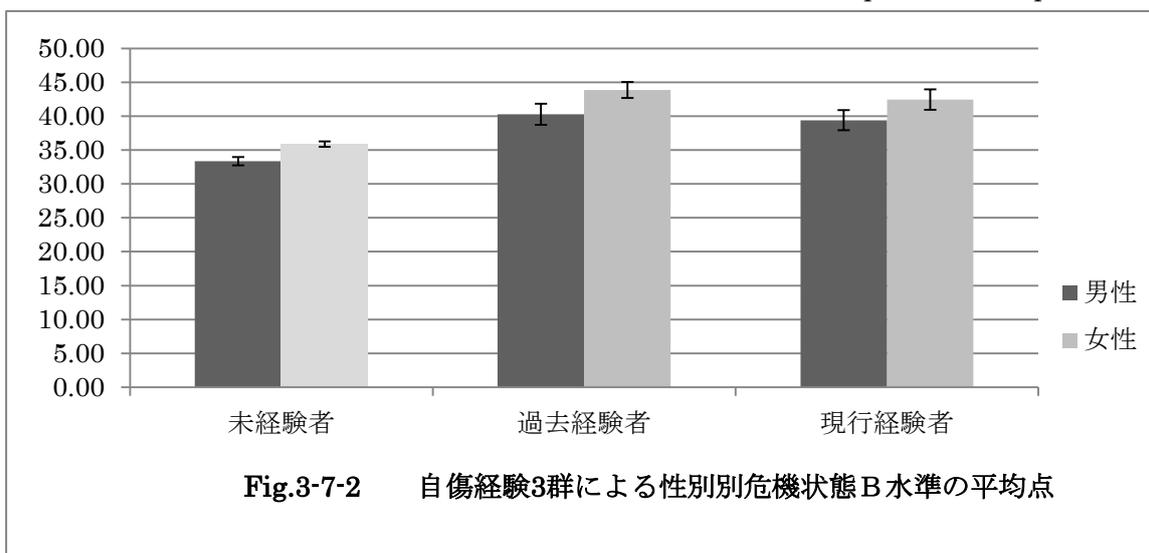


Fig.3-7-2 自傷経験3群による性別別危機状態 B 水準の平均点

※グラフには標準誤差を示してある。

5) 自傷経験 3 群による自我強度得点の分散分析

自傷経験 3 群による自我強度の差を検討するにあたり、はじめに分散性が成り立っていることを確認した。次に 1 元配置の分散分析を行った結果、 $F=6.86$ ($p<.01$) となり、自傷の経験によって差が認められた (Table3-7-6)。

6) 自傷の経験 3 群による自我強度得点の差

自傷経験 3 群による自我強度得点の差について Tukey の方法を用いて下位検定を行った。その結果、未経験者の方が現行経験者よりも自我強度得点が 1% 水準で有意に高いことが証明された (Table3-7-7, Fig.3-7-3)。

Table3-7-6 自傷経験 3 群と自我強度得点の分散分析結果

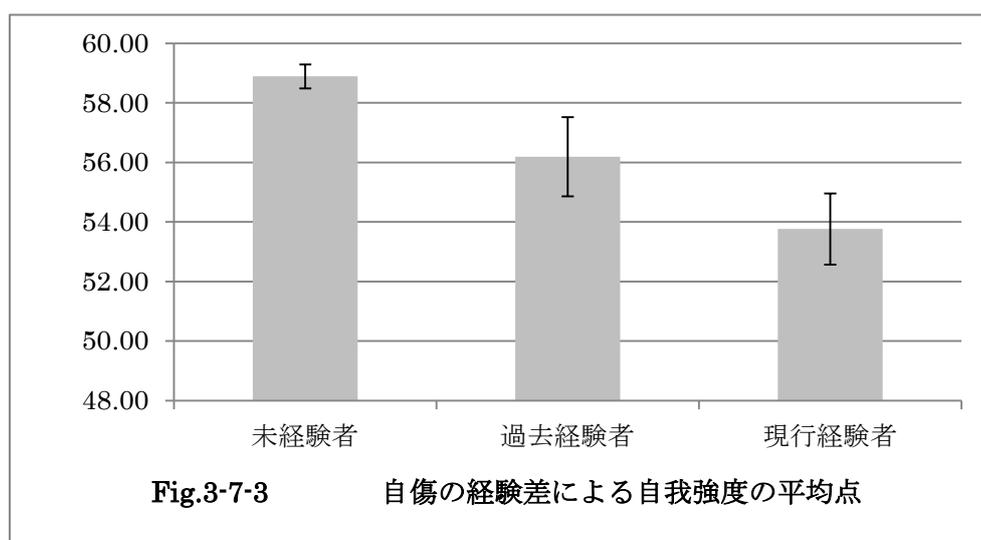
	平方和	自由度	平均平方	F 値
グループ間	1309.17	2	654.59	6.86**
グループ内	67585.00	713	95.46	

* $p<.05$ ** $p<.01$

Table3-7-7 自我強度得点における自傷の経験間の下位検定

	平均値	標準誤差	比較対象	平均値の差	標準誤差
未経験者	58.94	0.43	過去経験者	3.48	1.58
			現行経験者	5.09**	1.69
過去経験者	55.46	1.52	未経験者	-3.48	1.58
			現行経験者	1.62	2.23
現行経験者	53.85	1.63	未経験者	-5.09**	1.69
			過去経験者	-1.62	2.23

* $p<.05$ ** $p<.01$



※グラフには標準誤差を示してある。

7-2.自傷経験 3 群による危機状態 A 水準・B 水準、自我強度得点それぞれの分散分析（無作為抽出データ）

全データを用いた場合、サンプル数に大きな偏りがあったため、自傷経験差がそれぞれ同じくらいの数になるよう無作為抽出をし、同様の分散分析を行った（Table3-7-8）。

1)自傷経験 3 群による危機状態 A 水準の分散分析

自傷経験 3 群と危機状態 A 水準を検討するにあたり、はじめに分散性が成り立っていることを確認した。次に 1 元配置の分散分析を行った結果、 $F=7.06$ ($p<.01$) で、自傷の経験によって差が認められた（Table3-7-9）。

2)自傷経験 3 群による危機状態 B 水準の分散分析

自傷経験 3 群による危機状態 B 水準の差を検討するにあたり、はじめに分散性が成り立っていることを確認した。次に 1 元配置の分散分析を行った結果、 $F=16.01$ ($p<.01$) で、自傷の経験によって差が認められた（Table3-7-10）。

3)自傷経験 3 群による自我強度の分散分析

自傷経験 3 群と自我強度を検討するにあたり、はじめに分散性が成り立っていることを確認した。次に 1 元配置の分散分析を行った結果、 $F=4.37$ ($p<.05$) なので、自傷の経験によって差が認められた（Table3-7-11）。

Table3-7-8 無作為抽出による自傷経験 3 群のデータ数

	男性	女性	合計
未経験者	18	38	56
過去経験者	14	40	54
現行経験者	16	30	46

Table3-7-9 自傷経験 3 群による危機状態 A 水準の分散分析結果

	平方和	自由度	平均平方	F 値
グループ間	1200.65	2	600.33	7.06**
グループ内	12847.79	151	85.09	

* $p<.05$ ** $p<.01$

Table3-7-10 自傷経験 3 群による危機状態 B 水準の分散分析結果

	平方和	自由度	平均平方	F 値
グループ間	1856.77	2	928.39	16.01**
グループ内	8638.04	149	57.97	

* $p<.05$ ** $p<.01$

Table3-7-11 自傷経験 3 群による自我強度の分散分析結果

	平方和	自由度	平均平方	F 値
グループ間	714.44	2	357.22	4.37*
グループ内	12093.29	148	81.71	

* $p<.05$ ** $p<.01$

第4章 考察

第1節 危機状態B水準は自傷傾向を予測できるか

危機状態 B 水準において、不登校とは異なる問題をもつ青年に対しても検討が行えるのだろうかという関心から問題意識を持ち、自傷傾向を用いて確認を行った。その結果、危機状態 B 水準と自傷傾向の間に、男性は弱い正の相関 (Fig.3-6-1)、女性は中程度の正の相関 (Fig.3-6-2) があるという結果がえられた。そのため、ある程度は関係しているが、危機状態 B 水準の質問項目では、自傷傾向と強い関連があるとは言えない。これより、男性は不適応状態を測定する危機状態 B 水準 (問題自覚水準) の不適応状態得点から自傷傾向を予測することはできないが、女性は予測できる可能性があるのではないだろうかといえる。

第2節 後期青年期における自我発達上の危機状態への心理過程

自我強度の弱さから危機状態 A 水準に移行し、さらに危機状態 A 水準から B 水準へ移行するという心理過程が、自我同一性の課題が最も顕著になる後期青年期においてもみられるのか検討を行った。その結果、長尾 (2002) による先行研究 (Fig.1-2-1) と同様の関係があるということが明らかとなった (Fig.3-6-1, Fig.3-6-2)。これより、後期青年期においても、長尾 (2002) で示された前期青年期における青年期の自我発達上の葛藤から不適応状態への心理過程は同じであるという結果が得られた。

第3節 仮説の検討

自我強度、危機状態 A 水準・B 水準、および自傷傾向の 4 者について、仮説の図 (Fig.1-4-1) で示した通りの関係がみられるのかどうかを検討した。結果、男女で異なった関係が示された (Fig.3-6-1, Fig.3-6-2)。

男性 (Fig.3-6-1) においては、自我強度が低いほうが危機状態 A 水準に影響し、さらに危機状態 A 水準から B 水準へと影響を与えていくことが確認された。また、自我強度が低いことは危機状態 B 水準へも影響を与えることが示唆された。しかし、危機状態 A 水準から自傷傾向への影響は見られなかった。

女性 (Fig.3-6-2) においては男性と同様、自我強度が低いことが危機状態 A 水準に影響し、危機状態 A 水準から B 水準への影響もあることが示唆された。また、自我強度が低いことが危機状態 B 水準に影響することも示唆された。また、男性と同様に危機状態 A 水準から自傷傾向への影響は認められなかった。しかし、男性と異なり自我強度の低さが自傷傾向に影響しているという結果がみられた。

これより、自我強度が低いと危機状態 B 水準に影響することは男女共に仮説が証明された。一方、自我強度が低いと自傷傾向に影響することは女性の場合に証明されたが、男性の場合はそのような影響はみられなかった。

また、危機状態 A 水準が B 水準に影響を及ぼすことは先述の通り認められたが、危機状態 A 水準が自傷傾向に影響するという事は男女共にみられなかった。

それではなぜ男性において、自我強度が低いことが自傷傾向に影響を及ぼさず、男女共に危機状態 A 水準が自傷傾向に影響しなかったのでしょうか。

男性において自我強度が低いことが自傷傾向に影響を及ぼさないということに関しては第 4 節で後述することとし、まず、男女共に危機状態 A 水準が自傷傾向に影響しないということに関して述べる。松本・今村（2006）によれば自傷行為と親への不信感の関係していると述べられている。危機状態 A 水準は、親といっしょにいてだけで何となく安心できる反面、自分をほうっておいてほしいという気持ちがあるなど親への両価的な葛藤について問う項目が 1/3 を占めていた。親への不信感を持って自傷傾向へと繋がっている者は親へのこのような独立と依存のアンビバレンスを感じていないので、親への両価的な葛藤について問う質問に対して「あまりそうでない」や「そうでない」と回答することになり、危機状態 A 水準得点が低くなったのではないかと推察される。そのため、危機状態 A 水準得点が高ければ自傷傾向も高くなるという仮説が成り立たなかった可能性が考えられる。

第 4 節 男女による違いについて

本研究では、自傷傾向に関して男女間に違いがあることが明らかとなった。また、自我の強度が低くなることで自傷傾向が高くなったり、青年期の自我発達上の危機において自傷傾向が高まるのは女性特有のものであり、男性は自我の弱さや青年期の自我発達上の危機状態から自傷傾向が高くなることはほぼないということが示唆された。

まず、自傷傾向において男性の方が女性よりも自傷傾向が有意に高かったことについて述べる。自傷傾向尺度に関する先行研究（岡田，2002）でも男性の方が有意に高いという結果が得られている。項目ごとの t 検定について岡田（2002）と本研究での結果（Table3-4-1）を比べてみると、29 項目中 25 項目において有意差のある項目と有意差のない項目が一致していた。また、安岡（1996）は、臨床経験の中で自傷行為が 10 代 20 代の若者、特に未婚の女性に多く行われるという特徴を述べている。臨床の報告とは異なって、男性が有意に高いという結果が生じたのは、この質問紙の特徴であるように考えられる。自傷傾向尺度で男性の方が女性よりも有意に高いという結果が現れた理由を考えた場合、噛んだり、殴ったり、ぶついたりという暴力的な項目によってこのような結果になった可能性があげられる。何故なら、男性は女性よりも攻撃性が高いといわれている（秦・湯川，2004）。自傷行為経験のある青年の特徴として、自分を殴ったり、壁に頭をぶついたりという特徴があり、一般男性の攻撃的特徴と自傷行為を行う者の特徴が共通していたために生じた結果だと思われる。しかし、自傷傾向尺度合計得点と刃物による自傷行為について聞いた項

目 19 の得点の相関係数は男性においては $r=.48(p<.01)$ 、女性においては $r=.40$ ($p<.01$) であった。これより、自傷傾向得点と刃物による自傷行為は関係があると言える。従って、この尺度が一般的な行為の延長線上に自傷行為がある可能性をみることができる。そのためにこの尺度合計得点は男性の方が高くなったと考えられる。自傷傾向質問紙については、男性用と女性用を分けて作成するか、実際の自傷行為の得点に重みを加えることでより正確な自傷傾向質問紙が作成できるのではないかと考えられる。また、このような点を考慮した質問紙があれば、自我が弱くなったとしても男性は自傷傾向にそれほど影響しないのではないかという仮説を検討できると考える。

次に、自我の弱さや青年期の自我発達上の危機において自傷傾向が高まるのは女性特有のものであり、男性は自我の弱さや青年期の自我発達上の危機状態から自傷傾向が高くなることはほぼないという結果について述べる。

このような違いが生まれてくることに関して、2つのことが考えられる。

まず、先述したとおり、本研究で自傷傾向質問紙が男性にとって青年期の自我発達上の危機状態とは関連しない自傷傾向について質問している可能性である。そして、男性において自我の強弱が自傷行為へと繋がるのではなく他のものへ繋がるので自傷傾向とは関連が生じなかった可能性があげられる。

後者については、安岡 (1996) による臨床経験の中で、自傷行為が 10 代 20 代の若者、特に未婚の女性に多く行われるという特徴を述べていることから示唆される。

最後に、危機状態 B 水準得点において男性よりも女性の方が有意に高かったが、先行研究においては大学生において男女差は認められていない (長尾, 2005)。これは、3 件法であった危機状態 B 水準尺度を本研究では 5 件法で尋ねたことで生じた可能性が考えられる。また、先行研究 (長尾, 2005) では因子ごとの男女差も認められなかったが、本研究では因子ごとで男女差を検討した場合もすべての因子において女性の方が有意に得点が高いという結果と得た。しかし、本研究だけでは危機状態 B 水準得点は女性の方が有意に高くなる傾向にあるとは言い切れない。そのため、対象を広げ標本数を増やしたり、他の地域でも調査を行う必要があるといえる。

第 5 節 自傷行為の経験 3 群による相違

危機を乗り越えて自我が強くなるという説を確認するために、自我の強さの程度、危機状態 A 水準・B 水準の 3 得点において、自傷経験 3 群間の差を検討した。

危機状態 A 水準・B 水準得点において過去経験者は、現行経験者と差がなく、未経験者と比べて有意に得点が高かった。自我強度得点において過去経験者は未経験者と現行経験者の両方と有意な差がなかった。

現行経験者も先述の通り危機状態 A 水準・B 水準得点において過去経験者と差がなく、未経験者と比べて有意に得点が高かった。そして、自我強度得点に

については未経験者に対して有意に得点が低かった。

そして、未経験者については、危機状態 A 水準において過去経験者と比べて有意に低く、危機状態 B 水準において過去経験者・現行経験者と比べて有意に低く、自我強度において現行経験者と比べて有意に高いということが示された。

このことより、未経験者群が自傷経験 3 群の中で最も精神的に健康的な群であることがうかがえる。また、現行経験者においては青年期の自我発達上の危機状態にあり、危機状態 A 水準・B 水準得点が未経験者より高く、自我強度が弱いのではないだろうかという仮説が証明された。

それでは、自我強度において現行経験者・未経験者と比べ過去経験者に有意な差が認められなかったのはなぜだろうか。

過去経験者と現行経験者の間に差がなかったのも、仮説は立証されず自傷行為を経て自我が強くなったとは言えないという結果であった。しかし、過去経験者の自我強度得点は未経験者と現行経験者の間に位置している (Fig.3-7-2)。このことから、有意な差はないものの過去経験者は自我が弱い者から強い者へと移行している時期である可能性が考えられる。これは、自我は強くなったとは言いきれないが、自我の成長が促進された状態であるという可能性が言える。

過去経験者と言っても 2~3 年以内に自傷行為を経験したとのことなので、まだ自我を強くするところまで辿りついていないということなのかもしれない。これは、過去経験者の危機状態 A 水準得点が高いこと (Table3-7-3, Fig.3-7-1) から考えられる。先述の親への不信感を持って自傷行為へと繋がっている者は危機状態 A 水準得点が低くなったという説を加味すると、自傷行為を乗り越えることで親への葛藤を含めた青年期の自我発達上の危機に向き合うことができるようになったという仮説を立てることができる。本研究では、自傷行為は青年期の自我発達上の危機における「成長」か「不適応」かを左右する分岐点であり、その分岐点を乗り越えることで青年期の自我発達上の危機状態から脱すると考えていた。しかし、自傷行為を脱することで青年期の自我発達上の危機に向かい合うことができるようになる可能性も考えられる。

過去経験者の危機状態 B 水準が現行経験者と有意な差がなく、未経験者より有意に高いこと (Table3-7-5, Fig.3-7-2) に関しても同様のことが言える。過去経験者は自傷行為を乗り越え、青年期の自我発達上の危機と向き合う自我強度を手に入れた段階 (Fig.3-7-3) であるために、実際の症状である危機状態 B 水準は変化するに至っていないという仮説が立てられる。

ただし、本研究での群分けが目的に沿ったものでなかったことにより、このような結果が生じた可能性もあげられる。本研究では、過去経験者を自傷傾向質問紙の項目 19 において、「2~3 年に数回したことがある」を選択した者とした。「1 年に数回する」を選択したものは現行経験者であるとみなしたが、「2~3 年に数回したことがある」の選択肢には「1 年に 1 回ずつする者」も含まれ、昨日自傷行為が行われた可能性を否定することはできない。この場合、そ

の者は現行経験者に含まれる。このように、過去経験者群のうち実際どれぐらいの割合が過去経験者であったのか確かめられていないという問題点があげられる。同様に未経験者についても、2~3年以前にしたことがある者は「2~3年に数回したことがある」にあてはまらないと考え、「したことがない」を選択した可能性が考えられる。そのため、未経験者群の中に過去経験者が含まれていた可能性が考えられる。

あるいは、本研究で取り上げなかった要因が絡んで過去経験者の危機状態 B 水準得点が未経験者より高かった可能性がある。そのため、今後改めて過去経験者と現行経験者を対象とした聞き取り調査などの質的な研究を行い明らかにしなければならない。

未経験者の A 水準得点が有意に低いということに関しては、自我強度が高いことから、青年期の自我発達上の危機と上手に付き合うことができているのではないかと考えられる。

第 6 節 結論

本研究で検討したこと、明らかとなったことを述べる。

まず、危機状態 B 水準において、不登校とは異なる問題をもつ青年に対しても検討が行えるのか自傷傾向を用いて確認を行った。結果、男性は不適応状態を測定する危機状態 B 水準（問題自覚水準）の不適応状態得点から自傷傾向を予測することはできないが、女性は予測できる可能性があると言える。

次に、自我強度の弱さから危機状態 A 水準に移行し、さらに危機状態 A 水準から B 水準へ移行するという心理過程が、自我同一性の課題が最も顕著になる後期青年期においてもみられるのか検討を行った。その結果、後期青年期においても、長尾（2002）で示された前期青年期における青年期の自我発達上の葛藤から不適応状態への心理過程は同じであるという結果を得られた。

そして、仮説の図（Fig.1-4-1）で示した通りの関係がみられるのかどうかを検討した。その結果（Table3-6-1, Fig.3-6-2）、自我強度が低いと危機状態 B 水準に影響することは男女共に仮説が証明された。一方、自我強度が低いと自傷傾向に影響することは女性の場合は証明されたが、男性の場合はそのような影響はみられなかった。また、危機状態 A 水準が B 水準に影響を及ぼすことは先述の通り認められたが、危機状態 A 水準が自傷傾向に影響するという事は男女共にみられなかった。

最後に、危機を乗り越えて自我が強くなるという説を確認するために、自我の強さの程度、危機状態 A 水準・B 水準得点において、自傷経験 3 群間の差を検討した。その結果、未経験者群が最も精神的に健康な群であることがうかがえた。また、現行経験者においては仮説が証明された。しかし、仮説に反して過去経験者と現行経験者の間に差がなかったため、結論として過去経験者の自我が強くなったとは言えない。これに関して、過去経験者の自我強度得点は未経験者と現行経験者の間に位置していることから（Fig.3-7-2）、有意な差はな

いものの過去経験者は自我が弱い者から強い者へと移行している時期ではないかと推察された。

第 7 節 今後の課題

本研究で生まれた課題として大きく以下の 3 点があげられる。

一つ目に、自傷傾向尺度の項目と男性の特性が重複している可能性があるため、男性用と女性用を分けた自傷傾向質問紙を作成するか、得点の重みづけを加えることでより正確な自傷傾向質問紙が作成できるのではないかと考えられる。このような点を考慮した質問紙を作成することで、男性は自我が弱くなったとしても自傷傾向にそれほど影響しないという仮説を検討できると思われる。

二つ目に、自傷経験 3 群のうち、過去経験者群が実際に過去経験者であったのか断定できない点があげられる。そのため、過去経験者であると断定できる「3 年以上過去にしたことがある」という選択肢を設けての再調査の必要が考えられる。またこれにより、過去経験者と未経験者も明確に分類できると考えられる。

三つめに、危機を乗り越えて自我が強くなるという説を確認するために、自我の強さの程度、危機状態 A 水準・B 水準それぞれの得点において、自傷経験 3 群間の差を検討した。これにより、仮説と合致した結果を得られた部分と得られなかった部分があった。これは、どのような要因が絡んでそのような結果になったのか現段階では推察ができない。そのため、聞き取り調査を行い質的に検討していく必要があると示唆された。

参考文献

- Krahe, B. 2001 *The Social Psychology of Aggression*. East Sussex. UK: Psychology Press. (秦一士・湯川進太郎編訳 2004 攻撃の心理学 北大路書房)
- 藤野慎平 2007 自傷傾向に影響を与える要因 千里山文学論集, 78, 69-86.
- 角丸歩 2004 大学生における自傷行為の臨床心理学的考察 臨床教育心理学研究, 30(1), 89-105.
- 角丸歩・山本太郎・井上健 2005 大学生の自殺・自傷行為に対する意識 臨床教育心理学研究, 31(1), 69-76.
- 菊池美名子 2008 現代社会における自傷行為の類型化とその課題 一橋研究, 33(2), 29-48.
- 小林伸行・濱川文彦・松尾雄三・高野正博 2009 治療経過中の自傷行為予測に対する初診時間診の有用性 —心療内科専門施設での検討— 心身医学, 49(11), 1201-1207.
- 前田重治 1976 心理面接の技術—精神分析的な心理療法入門— 慶応通信
- 松本俊彦 2009 自傷行為を繰り返す子 児童心理, 63(4), 363-368.
- 松本俊彦・今村扶美 2006 青年期における『故意に自分の健康を害する』行為に関する研究—中学校・高等学校・矯正施設における自傷行為の実態とその心理学的特徴— 明治安田こころの健康財団研究助成論文集, 42, 37-50.
- 松本俊彦・山口亜希子 2004 大学生における自傷行為の経験率 精神医学, 46, 473-479.
- 松本俊彦・山口亜希子 2005 嗜癖としての自傷行為 精神療法, 31, 329-332.
- 松本俊彦・山口亜希子 2006 自傷の概念とその研究の焦点 精神医学, 48, 468-479.
- 松本俊彦, 山口亜希子・阿瀬川孝治他 2005 過量服薬を行う女性自傷者の臨床的特徴—リスク予測に向けての自己式質問表による予備調査 精神医学, 47, 735-743.
- 長尾博 1989 青年期の自我発達上の危機状態尺度の作成の試み 教育心理学研究, 37(1), 71-77.
- 長尾博 1990 青年期の自我発達上の危機状態と性同一性形成との関連 活水論文集, 33, 79-93
- 長尾博 1994 青年期の自我発達上の危機状態尺度に関する内容的妥当性の検討 活水論文集, 37, 45-59.
- 長尾博 1995 青年期の自我発達上の危機状態尺度に関する信頼性の検討 活水論文集, 38, 49-77.
- 長尾博 1999 青年期の自我発達上の危機状態に影響を及ぼす要因 教育心理学研究 47, 141-149.
- 長尾博 2002 青年期の自我発達上の葛藤から不適応状態への心理過程 発達心理学研究 13(3), 295-306.

- 長尾博 2005 青年期の自我発達上の危機状態に関する研究 ナカニシヤ出版
- 長尾博 2007 自我強度尺度作成の試み 心理臨床学研究, 25(1), 96-101.
- 西平直喜 1990 シリーズ人間の発達 4 成人になること—生育史心理学から— 東京大学出版会
- 西園昌久・安岡誉 1979 手首自傷症候群 臨床精神医学, 8, 1309-1315.
- 岡田斉 2002 自傷行為に関する質問紙作成の試み 文教大学人間科学部人間科学研究, 24, 79-95.
- 岡田斉 2003 自傷行為に関する質問紙作成の試みⅡ 文教大学人間科学部人間科学研究, 25, 25-32.
- 岡田斉 2005 自傷行為に関する質問紙作成の試みⅢ—刃物による自傷行為に着目して— 文教大学人間科学部人間科学研究, 27, 39-50.
- 岡田斉 2010 自傷行為に関する質問紙作成の試みⅣ—行動抑制・行動賦活と自傷行為の頻度の関連性の検討— 文教大学人間科学部人間科学研究, 32, 73-78.
- 岡田萌々 2009 青年期における自傷行為と友人関係について—友人関係の質および依存性の観点から— 関西福祉科学大学大学院社会福祉研究科修士論文
- 岡田涼・谷伊織・大西将史・中島俊思・宮地泰士・藤田知加子・望月直人・大西彩子・松岡弥玲・辻井正次 2010 中学生における自傷行為の経験率—単一市内における全数調査から— 精神医学, 52(12), 1209-1212.
- 小此木啓吾・馬場禮子 1989 精神力動論—ロールシャッハ解釈と自我心理学の統合— 金子書房
- 清水将之・頼藤和寛 1976 青春危機について-1-文献展望と予備的考察 精神医学, 18(2), 145-152.
- 下坂幸三 1976 成熟危機という概念 臨床精神医学, 5, 1211-1215.
- 竹内龍雄・小泉準三・上月英樹・白石博康・嶋崎素吉・宮本真理・須磨崎加寿子・長瀬精一・大福浩二郎 1986 Wrist Cutting の 30 自験例について 臨床精神医学, 15(2), 217-227.
- 宅香菜子 2002 思春期自我発達の促進要因に関する理論的検討—ストレス体験過程の積極的意義に着目したモデルの構築の提案— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科, 49, 169-179.
- Walsh, B. W. & Rosen, P. M. 1988 Self-mutilation: Theory, Research, and Treatment. Guilford Press. (松本俊彦・山口亜希子・小林桜児訳 2005 自傷行為—実証的研究と治療方針 金剛出版)
- 渡辺由紀子 2005 日常臨床における自傷行為 精神療法, 31, 327-328.
- 山口快生・長尾博 1995 女子大生における自我同一性の発達 文芸と思想, 59, 109-118, 1995.
- 安岡誉 1996 自殺企図・自傷行為 臨床精神医学, 25(7), 767-772.

謝辞

本論文を執筆するに当たり、多くの方に大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

まず論文の構想段階から完成にいたるまで、二年間を通して丁寧な指導をしてくださった本学大学院教授、鎌田次郎先生に厚く御礼申し上げます。先生の多角的な視点の提供と教育に対する熱意、ご配慮をいただいたことが本論文を書き上げるにあたり、非常に大きな支えになりました。ありがとうございました。

臨床的な研究とは何かについてご指導いただき、研究開始への背中をおししてくださいました本学本宮幸孝先生、データの統計処理に対する視点をお教えた本学治部哲也先生、アドバイザーとして私を支えてくださいました渡部敦子先生、永田俊代先生にも厚く御礼申し上げます。

研究計画から本研究について相談にのってくださった鎌田ゼミの尾濱沙織さん、高内百合子さん、畑下真里奈さん、水本尚吾さん、そのほかの本学修士課程の仲間にもこの場を借りて御礼申し上げます。

また本学で修士論文を書き上げるきっかけをくださった登校拒否文化医学研究所高橋良臣先生、山梨英和大学大学院五味義夫先生にもこの場を借りて御礼申し上げます。

そして山梨、神奈川、大阪と移った私の生活を応援してくれた家族、親族にも感謝申し上げます。

最後に、貴重な授業のお時間を使わせて調査をさせていただきました先生方、調査にご協力いただいた本学学生の皆様に心から感謝の意を表すると共に、厚く御礼申し上げます。

みなさんのお力添えがなければこの論文は完成しませんでした。心から御礼申し上げます。

平成 25 年 1 月 15 日

向島 知里

各質問項目の考え方が、自分にどの程度あてはまるかをお尋ねします。以下の文章を読んで、自分にもっともよくあてはまる箇所に○をつけてください。

まったく
そうではない
あまり
そうではない
どちらでもない
だいたい
そうである
まったく
その通りである

1.今、自分の将来の進路について決定を迫られても何を基準にして考えたらいいかわからない	5	4	3	2	1
2.他人から「仲間はずれにされている」と感じることはほとんどない	5	4	3	2	1
3.私の生活はいきいきしているように思う	5	4	3	2	1
4.うちとけて話しができる人は、私にはあまりいないように思う	5	4	3	2	1
5.何でもものごとを始めるのがおっくう（めんどろ）だ	5	4	3	2	1
6.困っている時や悲しい時に、親に気持ちをわかってもらいたい反面、わかってもらえなくてもよいという気持ちもある	5	4	3	2	1
7.何かに迷っている時に、親に「これでいい」と聞きたい反面、聞かないで自分で解決したいと思う	5	4	3	2	1
8.これまで自分で将来や進路を決定した経験が少ないため、その決定を迫られると不安になる	5	4	3	2	1
9.私は、どのような職業にもつけるという気持ちになる時と何にもなれないのではないかと感じる時がある	5	4	3	2	1
10.私はこの社会では欠くことのできない存在だと思う	5	4	3	2	1
11.私には、おたがいに本当に理解し合える人は、ほとんどいないと思う	5	4	3	2	1
12.やれる自信があっても、人から見られているとうまくできない	5	4	3	2	1
13.親にもっと理解され、愛してもらいたい反面、理解してもらえなくてもよいという気持ちもある	5	4	3	2	1

	まったく そうでない	あまり そうではない	どちらでもない	だいたい そうである	まったく その通りである
14.ひとりで決心がつきにくい時には、親の意見に従いたい反面、自分で決心したい気持ちもある	5	4	3	2	1
15.今、将来の進路については、じっくり考えていてその決断ができる段階である	5	4	3	2	1
16.私には、「理想の自分」がたくさんあって、どれが本当になりたい自分なのかさっぱりわからない	5	4	3	2	1
17.私は悪い友だちに左右されることなく、いつも正しい決定を下すことができる	5	4	3	2	1
18.今、一つのことに集中して打ち込むことができない	5	4	3	2	1
19.うれしいこと、楽しいことは、まず親に報告したい気持ちもある反面、そのことを自分だけで大切にしたいという気持ちもある	5	4	3	2	1
20.親といっしょにいるだけで何となく安心できる反面、自分をほうっておいてほしいという気持ちがある	5	4	3	2	1
21.決断力があるため、今、何かの決定を迫られても混乱せず、決断できるだろう	5	4	3	2	1
22.今、何かに追いつめられているような感じをもっていて、自由に動けない気持ちである	5	4	3	2	1
23.親の言うこと、考えていることは、正しいと信じられる反面、疑問も生じてくる	5	4	3	2	1
24.大切な決断を迫られた場合、私はいつもじっくり考えた上で、思い切りよく決断できる	5	4	3	2	1
25.今の自分は本当の自分ではないような気がする	5	4	3	2	1
26.人といっしょにいて、たまらなく自分がいやになることがよくある	5	4	3	2	1

各質問項目の考え方が、自分にどの程度あてはまるかをお尋ねします。以下の文章を読んで、自分にもっともよくあてはまる箇所に○をつけてください。

あてはまる
 ややあてはまる
 わからない
 あてはまらない
 あまり
 あてはまらない

1.ときどき、たまらなく家出したくなる	5	4	3	2	1
2.何かにつけてよく心配する	5	4	3	2	1
3.心臓や胸の苦しみを感じることはほとんどない	5	4	3	2	1
4.非常に不思議な経験（例えば、 ^{れい} 霊を見たとか、神の声を聞いたなど）をしたことがある	5	4	3	2	1
5.学校へ行きたくない気持ちが生じることはあまりない	5	4	3	2	1
6.最近、朝起きにくく遅刻したり欠席したりすることがよくある	5	4	3	2	1
7.外に出ると（バスや店などで）、人から見られているのが気になる	5	4	3	2	1
8.いつも緊張してイライラしている	5	4	3	2	1
9.すぐ感情を傷つけられやすい	5	4	3	2	1
10.体のどこかが痛むようなことはほとんどない	5	4	3	2	1
11.最近、あまり食べなくても空腹を感じない	5	4	3	2	1
12.他の人が私の考えをすべてわかっているにちがいないと思う時がある	5	4	3	2	1
13.疲れやすいほうではない	5	4	3	2	1
14.人からからかわれていても平気です	5	4	3	2	1

	あてはまる	ややあてはまる	わからない	あまりあてはまらない	あてはまらない
15.死にたいという気持ちが生じることがよくある	5	4	3	2	1
16.憂 ^{ゆう} うつになることはめったにない	5	4	3	2	1
17.何を食べてもおいしくない	5	4	3	2	1
18.学校はおもしろいので家にばかりいたくない	5	4	3	2	1
19.いつも体中が疲れているような気がする	5	4	3	2	1
20.何か恐ろしい考えがいつも頭に浮かぶ	5	4	3	2	1
21.ときどき、頭に浮かんでくるつまらない考えに何日も悩まされる	5	4	3	2	1
22.怖い夢で目をさますことがよくある	5	4	3	2	1
23.毎日のように私をおびやかすようなことが起こる	5	4	3	2	1
24.両親や家族は、必要以上に私の欠点をとがめる	5	4	3	2	1

次に挙げる項目は過去2-3年の間に、その行為を行った頻度についてお聞きしています。あまり悩まずに、最もよくあてはまる箇所に○をつけてください。

一日に何度もする	毎日する	一週間に数回する	一カ月に数回する	二-三カ月に数回	一年に数回する	過去二-三年に数回したことがある	したことが一度もない
----------	------	----------	----------	----------	---------	------------------	------------

1. 爪をかむ	8	7	6	5	4	3	2	1
2. 手や足、顔をつねる	8	7	6	5	4	3	2	1
3. 手や足を噛む	8	7	6	5	4	3	2	1
4. わざと怖い番組をみる	8	7	6	5	4	3	2	1
5. 指をしゃぶる	8	7	6	5	4	3	2	1
6. 体毛を抜く (体毛のどの部分か○をつけてください) 髪の毛・まゆげ・まつげ・鼻毛・ひげ・その他 ()	8	7	6	5	4	3	2	1
7. 煙草を吸う	8	7	6	5	4	3	2	1
8. 皮膚に爪を立てたり引っ掻いたりする	8	7	6	5	4	3	2	1
9. 声がかれるほど歌ったり叫んだりする	8	7	6	5	4	3	2	1
10. 体を血が出るほど掻く	8	7	6	5	4	3	2	1
11. 目をこする	8	7	6	5	4	3	2	1
12. 骨を鳴らす (どこを鳴らすか○をつけてください) 手・指・足・肩・首・腰・その他 ()	8	7	6	5	4	3	2	1
13. 物を殴ったり、蹴ったりする	8	7	6	5	4	3	2	1
14. 唇をかむ	8	7	6	5	4	3	2	1

一日に何度もする	毎日する	一週間に数回する	一カ月に数回する	二―三カ月に数回	一年に数回する	過去二―三年に数回したことがある	したことが一度もない
----------	------	----------	----------	----------	---------	------------------	------------

15. 頭を壁や柱にぶつける	8	7	6	5	4	3	2	1
16. まばたきをたくさんする	8	7	6	5	4	3	2	1
17. ピアスを開ける	8	7	6	5	4	3	2	1
18. 髪の毛をかきむしる	8	7	6	5	4	3	2	1
19. 刃物で体を傷つける（引 ^ひ 搔 ^か く）・切る・刺す （該当箇所に○をつけてください） 顔・上腕・腕・手・胸部・腹部・太 ^ふ 腿 ^{とも} ふくらはぎ・足・その他（ ）	8	7	6	5	4	3	2	1
20. 無理やり食べる	8	7	6	5	4	3	2	1
21. 無理やり吐く	8	7	6	5	4	3	2	1
22. 物を食べない	8	7	6	5	4	3	2	1
23. 電車のホームや高いところへ行くと吸いこまれそうになる	8	7	6	5	4	3	2	1
24. 意味もなく歩き回る	8	7	6	5	4	3	2	1
25. 血を見るのが好き	8	7	6	5	4	3	2	1
26. 顔や頭をなぐる	8	7	6	5	4	3	2	1
27. 酒を飲む	8	7	6	5	4	3	2	1
28. 嫌われるとわかっていることをしてしまう	8	7	6	5	4	3	2	1
29. かさぶたやささくれを取る	8	7	6	5	4	3	2	1

各質問項目の考え方が、自分にどの程度あてはまるかを尋ねします。以下の文章を読んで、自分にもっともよくあてはまる箇所に○をつけてください。

	あてはまる	ややあてはまる	わからない	あまりあてはまらない	あてはまらない
1.私は思いどおりにならないとき、がまんできるほうである	5	4	3	2	1
2.私は、自分のことをよく知っている方である	5	4	3	2	1
3.私は、時と場合によってハメをはずすことができる	5	4	3	2	1
4.夢や空想は、自分にとっては今、生きていることよりも関心がある	5	4	3	2	1
5.私はよく切れやすい	5	4	3	2	1
6.人の気持ちがわからないほうだと思う	5	4	3	2	1
7.私は、いつもものの考え方が主観的、空想的だといわれる	5	4	3	2	1
8.問題に直面したとき、合理的解決法を知っているほうである	5	4	3	2	1
9.私は、融通性 <small>ゆうづうせい</small> がないほうだと思う	5	4	3	2	1
10.時々、自分のことがさっぱりわからなくなる	5	4	3	2	1
11.私は、いつも緊張している	5	4	3	2	1
12.私は、人からあてにされ、安定感のあるタイプである	5	4	3	2	1
13.私は、いつも感情的となって失敗しやすい	5	4	3	2	1
14.自分がどういう人間なのか、自分の性格がまだよくわからない	5	4	3	2	1
15.私は、現実を正しく見抜けるほうだ	5	4	3	2	1
16.私は、ストレス発散方法をよく知っている	5	4	3	2	1

	あてはまる	ややあてはまる	わからない	あまりあてはまらない	あてはまらない
17.私は、がんこだとよくいわれる	5	4	3	2	1
18.道徳的に許されないことを他の方法（趣味や気ばらし）でごまかす	5	4	3	2	1
19.あまり現実の世界に関心がなく、自分の世界を大切に する	5	4	3	2	1
20.私は、イライラしやすいタイプである	5	4	3	2	1
21.私は、いい出したら人のいうことを聞かないところがある	5	4	3	2	1
22.私は、ものごとを正しく、客観的にとらえることができる	5	4	3	2	1
23.私は、直接、他者へ攻撃性を示すので嫌われやすい	5	4	3	2	1
24.したいことをこらえるのは苦手だ	5	4	3	2	1

最後に以下の質問にお答えください。

Q1 あなたは普段どのようなことでストレスを発散していますか？

Q2 秋学期にもう一度調査をさせていただきたいと思っています。

データ処理の過程で同一人物であることを確かめますので、携帯番号の最後の4ケタを記入してください。※この情報は同一人物であるという確認のためにのみ使用致します。個人を特定しようとするものではありません。協力したくない方は無記入で結構です。

携帯番号の最後の4ケタ

もう一度記入漏れがないかご確認ください。

以上で、アンケートは終了です。

ご協力ありがとうございました。

各質問項目の考え方が、自分にどの程度あてはまるかをお尋ねします。以下の文章を読んで、自分にもっともよくあてはまる箇所に○をつけてください。

まったく
そうではない
あまり
そうではない
どちらでもない
だいたい
そうである
まったく
その通りである

1.今、自分の将来の進路について決定を迫られても何を基準にして考えたらいいかわからない	5	4	3	2	1
2.他人から「仲間はずれにされている」と感じることはほとんどない	5	4	3	2	1
3.私の生活はいきいきしているように思う	5	4	3	2	1
4.うちとけて話しができる人は、私にはあまりいないように思う	5	4	3	2	1
5.何でもものごとを始めるのがおっくう（めんどろ）だ	5	4	3	2	1
6.困っている時や悲しい時に、親に気持ちをわかってもらいたい反面、わかってもらえなくてもよいという気持ちもある	5	4	3	2	1
7.何かに迷っている時に、親に「これでいい」と聞きたい反面、聞かないで自分で解決したいと思う	5	4	3	2	1
8.これまで自分で将来や進路を決定した経験が少ないため、その決定を迫られると不安になる	5	4	3	2	1
9.私は、どのような職業にもつけるという気持ちになる時と何にもなれないのではないかという気持ちになる時がある	5	4	3	2	1
10.私はこの社会では欠くことのできない存在だと思う	5	4	3	2	1
11.私には、おたがいに本当に理解し合える人は、ほとんどいないと思う	5	4	3	2	1
12.やれる自信があっても、人から見られているとうまくできない	5	4	3	2	1
13.親にもっと理解され、愛してもらいたい反面、理解してもらえなくてもよいという気持ちもある	5	4	3	2	1

	まったく その通りである	まったく そうである	どちらでもない	あまり そうではない	まったく そうでない
14.ひとりで決心がつきにくい時には、親の意見に従いたい反面、自分で決心したい気持ちもある	5	4	3	2	1
15.今、将来の進路については、じっくり考えていてその決断ができる段階である	5	4	3	2	1
16.私には、「理想の自分」がたくさんあって、どれが本当になりたい自分なのかさっぱりわからない	5	4	3	2	1
17.私は悪い友だちに左右されることなく、いつも正しい決定を下すことができる	5	4	3	2	1
18.今、一つのことに集中して打ち込むことができない	5	4	3	2	1
19.うれしいこと、楽しいことは、まず親に報告したい気持ちもある反面、そのことを自分だけで大切にしたいという気持ちもある	5	4	3	2	1
20.親といっしょにいるだけで何となく安心できる反面、自分をほうっておいてほしいという気持ちがある	5	4	3	2	1
21.決断力があるため、今、何かの決定を迫られても混乱せず、決断できるだろう	5	4	3	2	1
22.今、何かに追いつめられているような感じをもっていて、自由に動けない気持ちである	5	4	3	2	1
23.親の言うこと、考えていることは、正しいと信じられる反面、疑問も生じてくる	5	4	3	2	1
24.大切な決断を迫られた場合、私はいつもじっくり考えた上で、思い切りよく決断できる	5	4	3	2	1
25.今の自分は本当の自分ではないような気がする	5	4	3	2	1
26.人といっしょにいて、たまらなく自分がいやになることがよくある	5	4	3	2	1

各質問項目の考え方が、自分にどの程度あてはまるかをお尋ねします。以下の文章を読んで、自分にもっともよくあてはまる箇所に○をつけてください。

	あてはまる	ややあてはまる	わからない	あまりあてはまらない	あてはまらない
1.ときどき、たまらなく家出したくなる	5	4	3	2	1
2.何かにつけてよく心配する	5	4	3	2	1
3.心臓や胸の苦しみを感じることはほとんどない	5	4	3	2	1
4.非常に不思議な経験（例えば、 ^{れい} 霊を見たとか、神の声を聞いたなど）をしたことがある	5	4	3	2	1
5.学校へ行きたくない気持ちが生じることはあまりない	5	4	3	2	1
6.最近、朝起きにくく遅刻したり欠席したりすることがよくある	5	4	3	2	1
7.外に出ると（バスや店などで）、人から見られているのが気になる	5	4	3	2	1
8.いつも緊張してイライラしている	5	4	3	2	1
9.すぐ感情を傷つけられやすい	5	4	3	2	1
10.体のどこかが痛むようなことはほとんどない	5	4	3	2	1
11.最近、あまり食べなくても空腹を感じない	5	4	3	2	1
12.他の人が私の考えをすべてわかっているにちがいないと思う時がある	5	4	3	2	1
13.疲れやすいほうではない	5	4	3	2	1
14.人からからかわれていても平気です	5	4	3	2	1

	あてはまる	ややあてはまる	わからない	あまりあてはまらない	あてはまらない
15.死にたいという気持ちが生じることがよくある	5	4	3	2	1
16.憂 ^{ゆう} うつになることはめったにない	5	4	3	2	1
17.何を食べてもおいしくない	5	4	3	2	1
18.学校はおもしろいので家にばかりいたくない	5	4	3	2	1
19.いつも体中が疲れているような気がする	5	4	3	2	1
20.何か恐ろしい考えがいつも頭に浮かぶ	5	4	3	2	1
21.ときどき、頭に浮かんでくるつまらない考えに何日も悩まされる	5	4	3	2	1
22.怖い夢で目をさますことがよくある	5	4	3	2	1
23.毎日のように私をおびやかすようなことが起こる	5	4	3	2	1
24.両親や家族は、必要以上に私の欠点をとがめる	5	4	3	2	1

次に挙げる項目は過去2-3年の間に、その行為を行った頻度についてお聞きしています。あまり悩まずに、最もよくあてはまる箇所に○をつけてください。

一日に何度もする	毎日する	一週間に数回する	一カ月に数回する	二-三カ月に数回	一年に数回する	過去二-三年に数回したことがある	したことが一度もない
----------	------	----------	----------	----------	---------	------------------	------------

1. 爪をかむ	8	7	6	5	4	3	2	1
2. 手や足、顔をつねる	8	7	6	5	4	3	2	1
3. 手や足を噛む	8	7	6	5	4	3	2	1
4. わざと怖い番組をみる	8	7	6	5	4	3	2	1
5. 指をしゃぶる	8	7	6	5	4	3	2	1
6. 体毛を抜く (体毛のどの部分か○をつけてください) 髪の毛・まゆげ・まつげ・鼻毛・ひげ・その他 ()	8	7	6	5	4	3	2	1
7. 煙草を吸う	8	7	6	5	4	3	2	1
8. 皮膚に爪を立てたり引っ掻いたりする	8	7	6	5	4	3	2	1
9. 声がかれるほど歌ったり叫んだりする	8	7	6	5	4	3	2	1
10. 体を血が出るほど掻く	8	7	6	5	4	3	2	1
11. 目をこする	8	7	6	5	4	3	2	1
12. 骨を鳴らす (どこを鳴らすか○をつけてください) 手・指・足・肩・首・腰・その他 ()	8	7	6	5	4	3	2	1
13. 物を殴ったり、蹴ったりする	8	7	6	5	4	3	2	1
14. 唇をかむ	8	7	6	5	4	3	2	1

一日に何度もする	毎日する	一週間に数回する	一カ月に数回する	二―三カ月に数回	一年に数回する	過去二―三年に数回したことがある	したことが一度もない
----------	------	----------	----------	----------	---------	------------------	------------

15. 頭を壁や柱にぶつける	8	7	6	5	4	3	2	1
16. まばたきをたくさんする	8	7	6	5	4	3	2	1
17. ピアスを開ける	8	7	6	5	4	3	2	1
18. 髪の毛をかきむしる	8	7	6	5	4	3	2	1
19. 刃物で体を傷つける（引 ^ひ 搔 ^か く）・切る・刺す （該当箇所に○をつけてください） 顔・上腕・腕・手・胸部・腹部・太 ^ふ 腿 ^{とも} ふくらはぎ・足・その他（ ）	8	7	6	5	4	3	2	1
20. 無理やり食べる	8	7	6	5	4	3	2	1
21. 無理やり吐く	8	7	6	5	4	3	2	1
22. 物を食べない	8	7	6	5	4	3	2	1
23. 電車のホームや高いところへ行くと吸いこまれそうになる	8	7	6	5	4	3	2	1
24. 意味もなく歩き回る	8	7	6	5	4	3	2	1
25. 血を見るのが好き	8	7	6	5	4	3	2	1
26. 顔や頭をなぐる	8	7	6	5	4	3	2	1
27. 酒を飲む	8	7	6	5	4	3	2	1
28. 嫌われるとわかっていることをしてしまう	8	7	6	5	4	3	2	1
29. かさぶたやささくれを取る	8	7	6	5	4	3	2	1

各質問項目の考え方が、自分にどの程度あてはまるかを尋ねします。以下の文章を読んで、自分にもっともよくあてはまる箇所に○をつけてください。

	あてはまる	ややあてはまる	わからない	あまりあてはまらない	あてはまらない
1.私は思いどおりにならないとき、がまんできるほうである	5	4	3	2	1
2.私は、自分のことをよく知っている方である	5	4	3	2	1
3.私は、時と場合によってハメをはずすことができる	5	4	3	2	1
4.夢や空想は、自分にとっては今、生きていることよりも関心がある	5	4	3	2	1
5.私はよく切れやすい	5	4	3	2	1
6.人の気持ちがわからないほうだと思う	5	4	3	2	1
7.私は、いつもものの考え方が主観的、空想的だといわれる	5	4	3	2	1
8.問題に直面したとき、合理的解決法を知っているほうである	5	4	3	2	1
9.私は、融通性 <small>ゆうづうせい</small> がないほうだと思う	5	4	3	2	1
10.時々、自分のことがさっぱりわからなくなる	5	4	3	2	1
11.私は、いつも緊張している	5	4	3	2	1
12.私は、人からあてにされ、安定感のあるタイプである	5	4	3	2	1
13.私は、いつも感情的となって失敗しやすい	5	4	3	2	1
14.自分がどういう人間なのか、自分の性格がまだよくわからない	5	4	3	2	1
15.私は、現実を正しく見抜けるほうだ	5	4	3	2	1
16.私は、ストレス発散方法をよく知っている	5	4	3	2	1

	あてはまる	ややあてはまる	わからない	あまりあてはまらない	あてはまらない
17.私は、がんこだとよくいわれる	5	4	3	2	1
18.道徳的に許されないことを他の方法（趣味や気ばらし）でごまかす	5	4	3	2	1
19.あまり現実の世界に関心がなく、自分の世界を大切に する	5	4	3	2	1
20.私は、イライラしやすいタイプである	5	4	3	2	1
21.私は、いい出したら人のいうことを聞かないところがある	5	4	3	2	1
22.私は、ものごとを正しく、客観的にとらえることができる	5	4	3	2	1
23.私は、直接、他者へ攻撃性を示すので嫌われやすい	5	4	3	2	1
24.したいことをこらえるのは苦手だ	5	4	3	2	1

最後に以下の質問にお答えください。

Q1 あなたは普段どのようなことでストレスを発散していますか？

Q2 春学期にご回答いただきました調査結果と今回の調査結果をもとにデータ処理を行いたいと考えております。そのため同一人物であることを確認させていただきたいと思っておりますので、7月に使用していた携帯番号の最後の4ケタをご記入ください。※この情報は同一人物であるという確認のためにのみ使用致します。個人を特定しようとするものではありません。協力したくない方は無記入で結構です。

携帯番号の最後の4ケタ

もう一度記入漏れがないかご確認ください。
以上で、アンケートは終了です。

ご協力ありがとうございました。